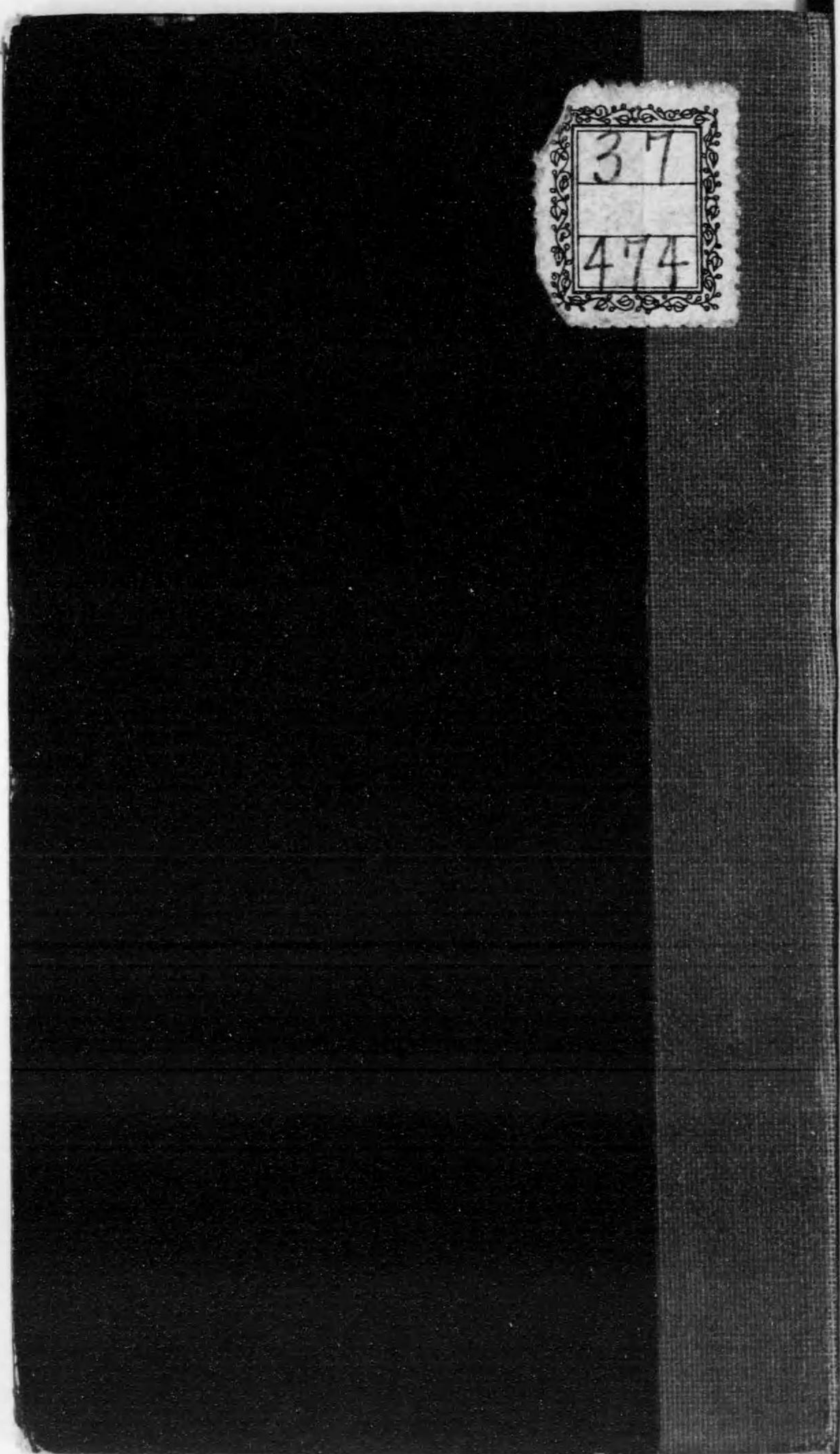


始



37
474



37-474



文學博士中島力造著

道徳
と
經濟

東京文陽堂發行

大正
4. 11. 2
内交

37-474

序 言

序 言

一、本書は最近數年間、予が各所の講演に於て卑見を陳じたる者、及び各雜誌社の請に應じて寄稿したるもの等を集め、聊か之に聯絡を附し、訂正増補して一卷を成せるものなり、されば往々前後重複し、間々冗漫に失せる箇所なきにあらざるべし、讀者幸に之を諒恕せよ。

一、本書は以上の如くにして成れりと雖も、聊か邦人の現代に處する覺悟を促し、日本國民として世界列國民と伍して恥かしからざる智徳を有せしめんことを慫慂し、爲に予が最近に於て歐米漫遊

を了して得たる實際上の經驗に基き、彼我對照して、我が國民の今後に執るべき態度及び用意を明かにしたり、幸にして讀書諸君の參考となる所あらば、予の満足に堪へざる所なり。

一、本書は通俗教訓書として編述せしものなれば、言卑近にして毫も粉色せる所なし、唯だ實際に廣く適用せんことを希ふのみ、固より識者の覽に供せん爲にあらず、讀者其の意を諒せよ。

大正四年九月

中島力造識

道徳と經濟

目次

第一章 國富増進の急務……………1

眞に勤儉の國民たれ ○最近二十年間に於ける歐米の大進歩 (1)交通機關の著しき發達 (2)學者の代替り (3)富の増加と生活程度 (4)米國に於ける驚くべき富の増加 (5)恐るべき米國人の活動力 ○我が國民の反省

すべき二點 ○肉食の普及と養鶏 ○歐米人の遠大な
 計畫と日本人の當座限りの計畫 ○米國に於ける獨
 力の模範町 ○國家の將來に取り危険なる現象 ○人
 口減少の恐るべき原因 ○偉人なきは現今の時弊 ○
 日本人の特色 (1)轉業の自在なる事 (2)手先の器用な
 る事 (3)簡易生活に慣れたる事 ○日本人は米國に必
 要なり

第二章 日本人の弱點……………二三

不規律なる生活 ○先づ社會の習慣より直せ ○家庭
 内の不規律 ○熟慮なき計畫 ○不規律の運動 ○規
 律生活を開始せよ ○子供に規律ある習慣を養へ ○
 親より手本を示せ ○家庭改良の必要なる所以 ○子
 供の教育を放任すべからず ○度量を大にすべし ○
 島國的根性を去れ ○思慮緻密なれ ○世界の地理歴
 史を授けよ ○氣輕に歐米諸國へ行け ○人の信用名
 譽を重んぜよ

第三章 質素生活の必要……………三〇

現代國民に最も必要なる生活 ○平素より困難に應ずる準備 ○國家將來に取つて危険なる傾向 ○内外二様の出來事 ○質素生活と今後の注意 (1)食物 (2)家屋 (3)衣服 (4)裝飾品 (5)社交上の心得 (6)虚飾を去ること○都鄙を通じたる奢侈の弊 ○質素生活の効果

第四章 青年と生活問題……………八一

學校卒業生の苦心 ○青年の生活と時勢の變遷 ○生活の程度を省みよ ○早く紳士たるべからず ○簡易生活を持続せよ ○青年と先輩の指導 ○青年自身の解決を要す ○青年は眼界を廣くすべし

第五章 我國の婦人と經濟……………九七

忙しい世の中 ○能く働くも甲斐なき婦人 ○婦人の

勢力省かるゝ時代 ○省かれた時間の善用 ○雑用に
 逐はるゝ日本婦人 ○心の働が大切 ○女子の地位を
 高めよ ○思考力の練習 ○年齢と共に進歩せよ ○
 今の婦人と其の婦人 ○男女の懸隔 ○萬事大ざつば
 ○獨逸の成功と勤儉 ○日本婦人目下の地位 ○子供
 の教育と我國の婦人

第六章 現代女子に要求する事項……………二四

中庸を得るは難し ○人の母たることを思へ ○忠愛

の精神を養へ ○武家の主婦と商家の主婦 ○品性と
 技術

第七章 戊申詔書の御趣旨……………三三

道徳と經濟との調和 ○世界的活動と日本の精神 ○
 忠君愛國の精神と日常生活 ○外人の見たる日本人の
 缺點 ○時間の經濟を知らぬ國民 ○廢物利用と日本
 人 ○女子教育と廢物利用 ○男女濫費の習慣 ○最
 も改善の急務たる我が實業道徳 ○勸勞を厭ふ風潮

- ◎人格を尊重せよ
- ◎拜金宗を排せよ
- ◎意志教育の必要

第八章 労働と倫理……………一七〇

- 我が國富の程度
- 労働の必要并に發達
- 我が邦人の労働に對する誤解
- 我國の労働を賤む實例
- 日本移民の二大缺點
- 今少しく働く國民たれ
- 體格養成の必要
- 労働は愉快なり
- 労働を厭ふより生ずる弊害
- 國の貧富は労働の度に因る
- 正當なる勞

- 労働の觀念を與へよ
- 労働者を卑下せぬ風を起せ
- 自助の精神を喚起せよ

第九章 労働の倫理的價值……………二〇四

- 労働思想の根本的改革
- 労働に對する世人の誤解
- 労働に對する歴史的觀察
- 労働の神聖、學者と労働
- 労働の社會的價值
- (イ)労働と富強
- (ロ)労働と富源の開拓
- (ハ)労働と文明の利器
- (ニ)労働と共同生活
- (ホ)監督者と労働
- 労働の個人的價值(イ)

保健と労働 (ロ)労働と長所の自覺 (ハ)労働と意志
の修養 (ニ)労働と知識の修養 (ホ)労働と感情の陶
冶 ○労働の價値

第十章 協同の責務 ……三二五

人は社會的動物なり ○人は社會の爲に貢獻すべし
○分業は進歩を促す ○學術界の分業 ○教育家と學
者の分業 ○分業に依て生ずる弊害 ○分業に伴ふ狭
隘の思想 ○個人的の弊と相互の衝突 ○分業の弊と

協同の必要、○プラトーの理想國 ○方今の弊は協同
を輕んず ○協同生活の習慣を養へ ○初等教育と協
同の鼓吹

第十一章 將來の道德と協同の必要 ……三二五

人は社會の保護を受けて成長す ○協同より受くる衣
食住の三要 ○人間の快樂と協同 ○文明生活と協同
一致 ○知識の應用と協同 ○品性修養と協同 ○時
勢の進歩と品性修養 ○道德史の新研究 (1)初期の道

徳 (2)個人主義、利己主義 (3)協同の道德 ○人智進歩の三階段 ○分業の進歩と個人主義 ○歐米諸國個人主義の弊害 ○第一期道德思想の人士 ○第二期道德思想の國民 ○綜合的道德の必要 ○協同一致と我國の現状 ○協同一致と今後の注意

第十二章 實業の發達と道德上の困難 ……三〇九

世界的に變化しつゝある我が社會 ○金力萬能主義の風靡 ○我國今日に缺乏せる富の力 ○我が美風良俗

の改善 ○道德實行法の變遷 ○實業の發達に伴ふ歐米諸國の弊害 (1)田舎を捨て、都會に集まるより生ずる風俗の壞亂 (2)都會へ集まる爲に生ずる廉恥心の缺乏 (3)工業の發達と家庭の破壊 (4)工業の爲に生ずる職務に忠實といふ感想の減少 (5)實業の發達は人の愛郷心を破壊す (6)傭主と被傭人との間に於ける恩義を忘れ人情を無くす (7)投機心が強くなり、實着の風がなくなる (8)貧富の懸隔より來る不平黨の増加と社會の秩序を保つ困難 (9)肉體的の快樂より外に何も分ら

ぬ人間の増加 (10) 獻身的精神、公共的精神の消滅 (11)
奈何して以上十箇條の弊害を除くべきか

第十三章 徳育の經濟的方面……………三五〇

必要にして困難なる國民徳化 ○教育勅語と其の應用
の困難 (1) 勤勞を避くる習慣を除け (2) 成功の眞意を
了解すべし (3) 質素生活の必要を解せよ (4) 日本人の
信用を高めよ (5) 廉耻心を養成せよ (6) 人格を尊重す
べし ○學校、家庭、社會の一致協力を望む。

附 録

(其一) 國民性の現在と將來……………三六九

- (一) 國民性の見方 (二) 樂天的國民 (三) 感情より見
たる日本人 (四) 感激性と慈悲心 (五) 日本人の意志
- (六) 日本人の知的方面 (七) 戦時と平常の愛國心
- (八) 日本人の嫉妬心 (九) 日本人の復讐心 (十) 國民
性の發展を圖れ

(其二) 風俗習慣の改善……………三六七

第一節より第十七節まで

道徳と經濟目次 終

道徳と經濟

文學博士 中島力造 述

第一章 國富増進の急務

眞に勤儉の國民たれ

列國對峙の今日に當り、苟も己が邦家をして富強者ならしめんと

欲せば、どうしても先づ國富を増進する方策を講じ、之をして國民



忠愛の精神と伴はしむる所がなくてはならぬ、然らざれば萬事列國に後れを取り、國家の面目を維持することすら出来ぬ。それに就いて私かに思ふには、我が國民は日露戦争後、一躍して世界文明國の班に列し、歐米各國と肩を比ぶるに至つたものゝ、其の強兵と伴ふべき國富の點に於ては、大に缺如たるものがある、どうしても今日國富の増進に努めねばならぬ、然るに我が國民は未だ眞に大なる富を造る方法を知らず、依然として舊幕時代よりの習慣に捉へられて、國民一般に勞働を賤み、之と反對に、眞に富を造る所以の質素生活に甘んじて實行することを爲さぬ、かくては到底富國強兵の實

績を擧ぐる事が出来ぬ、これは實に現代日本國民の一大缺點といはねばならぬ。
そこで私は、先づ我が國民上下をして勞働の神聖なることを知り、協同一致の必要なることを解し、國內の男女を擧げて、眞に勤儉を實行せしむる所がなくてはならぬ、畏多くも 明治天皇陛下の曩に戊申詔書を下し賜ひたるは、全く此の御趣旨に出でたものならんと拜察するのである。
所でかく我が國民をして勤儉實行の民たらしめんには、其の之を必要とする所以を了解せしめねばならぬ、それには歐米各國の現狀

を知り、其の兵力財力の優秀なる點を察し、成程之と對抗せんには、
 どうしても奮發努力事に従ふ所がなくてはならぬといふ精神覺悟を
 定めしめねばならぬ、そこで私は第一に、「如何にして我が國民の富
 と元氣を増すべきか」といふ問題に就いて、聊か論述せんと欲す
 るのである。

最近二十年間に於ける歐米の大進歩

私は一昨年二十年振りて再び歐米諸國を漫遊したが、其の第一に
 感じたことは、其間に於ける歐米諸國の進歩の著しいことであつ
 た、西洋人も日本へ來て、日本の進歩の著しいことを盛んに讚め立

てるのであるが、之を西洋諸國の著しい進歩に比してはとても及ば
 ぬと感じたのである、私は平素歐米の新聞雜誌によつて其日進月歩
 の勢を承知もし想像もして居つたが、實地に目撃するに及んで、聞
 きしに優る進歩であることを切に感じたのである、之が二度目の洋
 行の第一の所感であつた。

(1) 交通機關の著しき發達

以前留學して居つた頃には、電車とか地下鐵道とか、電話とかい
 ふやうな交通機關はなかつた、然るに今度行つて見ると、是等が諸
 方に行き渡つて、彼の國人の生活に必要な缺くべからざるものとなつ

て居る事に驚いた。

(2) 學者の代替り

又學界に就いて言へば、私共が以前就いて學んだ人は、大概死んで仕舞つて、代替りとなつて居ると言ふ有様、從て學説の如きも、大に變化して居つた、唯一人伯林で、九十歳になる老學者が、まだ生存して居られるばかりであつた。

(3) 富の増加と生活程度

殊に著しく感じたことは、西洋諸國が富んで來たことである、勿論國に依て、其の富の増し方は違つて居るが、一體に著しく富を増

し、生活の程度が高くなつて居た、獨逸は以前、生活程度が低くて、獨逸より英米諸國へ行くと、恰も田舎より都會へ出たやうな心持がしたのであつたが、今度行つて見ると、獨逸の市街は非常に綺麗になつたばかりでなく、生活の程度も大に高くなつて、獨逸より英米へ行つても、左程著しい差異を感じなかつたのである。

(4) 米國に於ける驚くべき富の増加

米國の富の増加に至ては、一層驚くべきものがある、以前は百萬弗以上あれば大富豪と言はれたものであつたが、今日にては一桁上つて億圓以上上つて居る、又以前はシカゴ以西には市といふもの

ものは殆どなかつたのであるが、今回通つて見ると、諸所に立派なる都市が出来て居た、現にソルト、レーキ市の如きは、邊陲の地であるといふので、モルモン宗徒を放逐する爲に移したのであつたが、歸路、其所に居る友人に逢ひに行つて、數日間滞在して諸所を見物したが、實に立派なる大市街となつて居た、かういふ風に、米國の進歩の著しい事は、特に目を時つるものが甚だ多くあつたのである。

(5) 恐るべき米國人の活動力

米國は國土が大きくて、鑛山や、其他の天産物に富んで居るが、米國人の働く力も亦實に盛んである、其働く力は、獨逸人も米國人

には及ばぬ、一體富の出来る原因は、働く力が最も重なるものである、我が國民は此點に於て今少し進まなくてはならぬと思ふ、學校へ行つて見ても、教ゆる教師も習ふ生徒も、其元氣の良い事は、迎も我國では見る事の出来ぬ有様である、我國も富を増す必要があるならば、國民の元氣を熾にして、勞働に堪ゆるやうにしなければならぬ。

我が國民の反省すべき二點

この元氣を増すといふ事に就いて、我が國民の反省すべき點が二つある、其一是偏智教育即ち知識を注入することのみ偏る教育を

排して、運動を熾にし、身體を鍛錬せしめなくてはならぬ、それと同時に、我が國民の多くが抱いて居る所の、働かぬことをエライと思ふ思想を棄て去らなくては、逆も米國人や獨逸人のやうに働く力が出ぬと思ふ。

而して其二是、日本人の食物が悪いことである、勿論人種が違ふので、顔色の相違もあらうが、然し粗食では逆も顔色の善くなる譯はない、どうしても、今少し食料を改良し、肉食を増して、活氣に富ましむるやうにすることが必要であると信ずる。

肉食の普及と養鶏

然らば如何にして、日本人に肉食をなさしむべきかといふに、予が旅行中終始考へて居つた素人考へでは、我が國民一般に、今少し養鶏を盛んにすることが出来ぬかと思ふたことである、養鶏が盛んになつて、其卵を食ひ、其肉を食ふやうになれば、最も手近に肉食増加を實行することが出来る、而して之は誰にでも容易に出来ることでないかと感じたのである。

歐米人の遠大なる計畫と、日本人の當座

限りの計畫

次に感じた事は、西洋ですることは、總て計畫が遠大と思ふたの

である、例へば住家にしても、學校にしても、百年二百年を保つやうに丈夫に建築し、新開墾地邊りでも永遠の計畫でやつて居る。之を我が國民が、其當座限りの計畫で事を爲し、五年か十年経てば又遣り變へなければならぬのとは、大に選を異にして居るのである。

米國に於ける獨力の模範町

私は始めて米國へ行つた時、直ちに田舎の中學校へ入學した、其町は人口が二千か三千位しかない小町であつたが、今度其處へ行つて見ると、其頃其町の近所に居つた一人の農家の青年が、非常なる財産家になつた、所が其人は自分の生れ故郷であるので、どうか此

の町を理想に叶つた模範町にしたいといふので、金銭は何萬でも要るだけ出す、其代り酒屋だけは、此の町から逐ひ出して呉れといふ條件を呈出した、其の町でも此の條件を承諾して改良に着手したのである、先づ第一には下水と淨水とを鐵管にて通じ、住家を改良し、道路を改修し、町の人々の集會所に宛つべき俱樂部を建て、それには圖書室もあれば遊戯室もあり、俱樂部として、何一つ不足のないやうに出來て居るといふ風に、永久的の考へを以て、着々とやつて居つた、今日の日本人の遣り方とは、大分違ふて居る、勿論之は金銭の力であるので、日本でも若し金銭さへあれば、出來る事である

が、此の點より考へて見ても、國富を増進するといふことが、如何に必要であるか分ることである。

● 國家の將來に取り危険なる現象

そこで國富を殖すに就いては、勤儉貯蓄を奨励する事は、大に必要であるが、それを奨励するに伴つて起る所の弊害もあるやうに思ふ。

其の第一は、餘りに勤儉貯蓄を勧めると、自分の財産を殖す事のみ心を凝いて、公共の爲に盡すといふ考が減ずる虞れがある、私の見た外國の都市でも、既に其の弊が現はれて居つた、私は日本で

も多少此の弊が既に現はれて來て居るやうに考ふるのである、其の一證として言へば、大學へ入る學生等の志望學科が、醫科とか工科とか、卒業後収入の多くある學科を選ぶ者の非常に増した事で分ると思ふ、文科とか理科とかいふ餘り収入のない所へは、入つて來なくなつた、私は青年學生等が、單に収入の多寡を以て其の去就を決するやうになつたのは、近來の著しい現象で、是は國家の將來に取り、甚だ好ましからぬことであるのみならず、寧ろ不完全なる現象であらうと考へるのである。

人口減少の恐るべき原因

それから之も或國で見えて来たことであるが、其國では勤儉貯蓄を奨励した結果、結婚して子供が出来ては暮し向が困難になるので、見合はせるとか、或は三人以上子供を拵へては生計が困難になるので、用心をする傾が殖えて、晩婚をするとか避妊をするとかする結果、餘程人口の減少を來して居るのである、之は實に國家將來のため憂ふべきことである。

偉人なきは現今の時弊也

英國あたりで、今や盛に研究されて居る善種學の立場よりいへば、用心深い立派な人の子が減つて、詰らぬ人の種子即ち劣種が殖える

といふ事は、大に熟慮を要する點である、即ち今日は實に平凡時代といふべきであつて、偉大なる人物は跡を断ちつゝある、即ち英國にはグラッドストンの如き大政治家なく、獨逸にはビスマルクの如き大人物なく、佛蘭西には、ガンベッタの如き俊傑がなくなり、また學術界を始め、其の他何れの方面にも、大人物といふものが次第に少なくなりつゝあるのは事實である、之は大に吾人の警戒すべき點で、成るべく劣等の種子を少くして優等の種子の殖えるやうにすることは、最大急務であらうと信するのである。

日本人の特色

翻て感じたことは、日本人の特色を失はぬやうに勉むることである、今日は何事も西洋風になつて、動ともすると、我國の特色を失ふ虞れがある、此の點は大に注意を要することと思ふ、そこで西洋人に比して我が邦人の特色と思はるゝ點を擧ぐれば、左の如き點であらう。

(1) 轉業の自在なる事

第一、日本人は西洋人に比して轉業が自在である、之は日本人の西洋人に比して長所で、西洋人には逆も出來ぬ所である、一體、文明が進むに連れて、分業が盛んになり、體格なり、精神上の習慣などが

の爲に、轉業が難くなるのである、そこで同盟罷工が多くなるのである、日本人は容易く轉業が出来るので、そんなことは滅多にせぬのである、若し之が出來なくなれば、破壊黨も出來れば、不平黨も出來るのである、然るに今日の教育は餘りに専門的の傾が強いので、遂には轉業の容易に出來ぬやうになりはせぬかとの憂が起るのである。

(2) 手先の器用なる事

今一つは日本人の手先の利くことである、歐米人は手先が誠に不器用である、之は日本人は箸で物を摘んで食ふのと、習字とに因て、

手先の練習をする爲であると言ふ人がある、若しペンで字を書いたり、フォークやナイフで飯を食ふやうになり、萬事西洋風になるならば、日本人も不器用になるかも知れぬ。

(3) 簡易生活に慣れたる事

第三は、日本人は簡易生活を爲し得るのである、是も外國人の眞似の出來ぬ所で、日本人の強い點である。

(4) 日本人は急ぎの仕事に長ず

第四は、日本人は働き出せば、ノベツに働き得るといふことである、先年桑港の加州議會で、日本人排斥の爲の調査委員が任命され

た時、其結果は、當初の目的に反して、日本人の必要といふことを議決した。元來加州は果物が大切の財源であるが、其の果物は時期を待たず、出來る時には一時に出來るので、その時に採らなければ腐つて仕舞ふ、然るに苺採りのやうな仕事は、腰を屈めて採らなければならぬので、西洋人には、とても長時間之に堪ゆることが出來ぬのである、日本人は斯る事は最も得意とする所であるので、果實産出地たる加州には、日本人は是非必要であると言つて居るのを聞いた。

以前私の洋行した時分には、日本人は非常に輕蔑されて居つた、

然るに今日では世界強國の列に入つたので、日本人自身も慢心して居るし、又或一部の人は、日本人を買ひ被り、又或人は敬遠主義を執つて居る、現に或人の言には、是迄は日本は弱い國とばかり思つて居つたので、弱者や子供に對するやうに同情を以て指導したのであるが、今日以後は、日本も世界の一等國に列したから、對等の國として遠慮なく競争をする、日本人は其積りで交際をしなければ、大なる禍を生ずるかも知れぬ、大に注意を要するといつた、今後我が國民は實力を以て世界列國に對せねばならぬため、大に注意警戒する所がなくてはならぬと感ずるのである。

第二章 日本人の弱點

さて人は誰でも、自分又は自家の弱點を言ふ事を好まぬ如く、自國の弱點を言ふのは好まぬので、成るだけ之を避けたいのであるが、國家將來の安寧又は發達の爲に、其の事を靜に考へ見なければならぬ必要があると思ふ、勿論それは決して誰と個人を指していふのではない、日本人全體としての事をいふのであつて、其例外の人も少くはないのである、今其弱點の二三に就て述べて見ようと思ふ。

不規律なる生活

第一に、日本の人民を歐米の最も進歩したる處の人民と較べ考へて見ると、其生活が不規律であると思ふ、不規律といふのは、總ての事を規則立つてせぬことをいふので、その事は誰も知つて居る通りである、即ち生活の仕方にきまりのないのを言ふのである、之を自由の生活であるを見ると、大層宜いのであるが、それでは今後は決して安心が出来ぬ、詳しく言へば、從來は今日我々がして居る如き不規律の生活でも、別に國に非常の危険も損害も與へなかつたのであるが、今後は萬事萬端外國人と競争して往かねばならぬので、今日の如き不規則なる生活の仕方をして居ては、外國人に何れの點に於

ても負ければならぬことになると思ふ、今此事を話すに就いては、先づ自分自身の手近い事より始めて見やう。

先づ社會の習慣より直せ

私自身の生活の仕方に就いて考へて見るに、外國の學者の生活に較べて、實に不規律なる生活であるといふことを日々感ずるのである、それならば、何故規律ある生活をせぬのかといふ質問が出来ぬが、それは出来るだけ試みて居るが、實際十分に實行が出来ぬのである。これは畢竟社會がさうなつて居らぬので、出来ぬのである、一日も早く此社會の風を改めて規則立つた生活を爲し、且つ自然規

則立つた生活をする習慣を付けることが必要であると思ふ。所が第一に、規則ある生活をしやうと思つても社會が許さぬ、又自分にも既に不規律の習慣があるので、其の生活が出来ぬ。西洋では、毎日、食事の時間、執務の時間、修養の時間、娯樂の時間と、總てチャンと極つて居る、日本の今日の生活はどうしても、その實行が出来難い、強て實行すれば世間の多くの人々と衝突する結果となる。

家庭内の不規律

次に一家の事にしても、規則がよく立つて居らぬ、それは小家庭でも、上流の家でも同じであらうと思ふ、總ての事が不規律である、

下女下男は譯もなく忙がしい、西洋では大家でも、極く僅かの僕婢で済む、それは規則が立つて居るため、日本で十人を要する家は、西洋では三人位で済むのである、それで西洋人は日本の家庭に多数の下女下男が居るのを見て、驚いて、日本人は何をして居るかというて居るが、皆忙がしいのである、それは約まる所、規律がないので、朝より晩まで忙がしいのである、さういふ譯で我國の家庭には、餘裕がないのである、誰も彼も、朝から晩まで忙がしくて何事も熟慮してする暇がない、それ故新しき事を始めると、それは中々整頓せぬ、約まる所、物を考へてせぬ爲に此結果を來たのである。

熟慮なき計畫

歐米では何事^{なにごと}にても永久^{えいきう}の利害損益^{そんえき}を熟慮^{じゆりよ}して其事^{そのこと}に着手^{てしやう}する風がある、それで事業^{じぎふ}は三十年五十年はおろか百年二百年も續^{つづ}く、人は變^{かは}つても其事業^{そのじぎふ}は、其跡^{あと}を引受^{ひきう}けて續^{つづ}いて居るが、今日^{こんにち}の日本では何事^{なにごと}も唯^{ただ}一時^{いちじ}の思^{おも}ひ付^つきて着手^{てしやう}し進行^{しんかう}するので永續^{えいぞく}せぬ、何事^{なにごと}でも少し面白^{おもしろ}くなくなると、自分^{じぶん}の思^{おも}ひ通^{とほ}りに往^{むか}かぬと、直^すぐに止めて仕舞^{しま}ふ、西洋^{せいやう}では始^{はじ}むる前に、能^よく考^かへて容易^{ようい}に始^{はじ}めぬが、始^{はじ}めた以上^{いじやう}は何處^{どこ}までも貫徹^{くわんてつ}しやうといふ精神^{せいしん}である、世^よに不始^{ふし}末^{まつ}の事^{こと}不規律^{ふぎりふ}の事^{こと}の多いのは、人^{ひと}に餘裕^{じゆりよ}がない、思慮^{しりよ}が足^{たり}らぬといふこと

とが、諸種^{しよしゆ}の事^{こと}の上に、非常^{ひじょう}なる損害^{そんがい}を生^はずる大^{だい}なる原因^{げんいん}になつて居^ゐると思^{おも}ふ。

不規律なる運動

又^{また}現今^{げんこん}の日本人^{にほんじん}を西洋人^{せいやうじん}に較^{くら}べて見^みると、日本人^{にほんじん}は一體^{いつたい}に身體^{しんたい}が弱^{じやく}いといふて差支^{さしつかへ}ない、之^{これ}は衣食住^{いしょくじゆ}其^{その}他に於^おて、不規律^{ふぎりふ}の生活^{せいかつ}をして居^ゐるといふことが、其^{その}一^{ひと}ツの重^{おも}なる原因^{げんいん}であらうと思^{おも}ふ、約^{やく}まる所^{ところ}、極^{きま}つて運動^{うんどう}をする人^{ひと}はないのである、即^{すなは}ち一週^{いちしゆかん}間の運動^{うんどう}を一日^{いちにち}にして仕舞^{しま}ひ、毎日^{まいにち}一時間^{いちじかん}とか二時間^{にじかん}とか、運動^{うんどう}を極^きめて實行^{じつかう}する人^{ひと}は少^{すく}いと思^{おも}ふ、其結果^{けいこく}自分^{じぶん}の事業^{じぎふ}の上に不便^{ふべん}を生^はずるのみな

らず、衛生上に於ても損害を生じて來るのである、若し我々が此不規律生活を改良せずして、何事にも不規律の生活をして、西洋の規律ある生活をするものと競走しなければならぬといふことになる、假りに一時は勝つとしても、到底彼等に永久に勝ち得ることは出來ぬことにならうと思ふ。

規律生活を開始せよ

今日の如く、總ての事が紊れて居る時代、即ち社會の混亂して居る時代に生れたものは、急に改むる事を得ぬが、我々の子孫には、規律ある生活を致させたいと思ふ。自然に規律ある生活をしなけれ

ばならぬやうな習慣を作つて置きたいと思ふ、規律を立て、其の規律に従つて生活しやうとすると一時は苦しいが、規律を正しくするのが當り前で、不規律は變則であるといふ風に教育すれば、規則を守ることは樂で、不規律にするのが苦しくなる。規律ある習慣を子孫に付けて行くのが、先づ我々が子孫に對して、せねばならぬ大切なる務めの一であると思ふ。

兒童青年に規律ある習慣を養へ

然らば、どうしたならば、宜いかといふに、種々説はあらうが、別に六づかしいことをせずともよいと思ふ、即ち兒童青年に規律の

習慣を養うて置けば、それが自然となる、例へば食事は成るべく極つて、時間にチャンと食する、夏は何時、冬は何時と極つて、必ず規律通りにする、又朝起をする時間にしても、年齢によつて、チャンと時を極めれば、必ず西洋人が實行して居る通りに出来る、それは大抵習慣で出来ることである。又學問をするにしても、何時より何時まで讀書をさせるとか、學校より歸つたならば、何十分間宅で書物を読ませるとか、或は學校で習つた書物を復習させる、それから遊びの時間を極めて何時より何時までは勝手に遊んでよい、何時より何時までは、別に用事はない、自分の好きなことをさせるといふ

風に、自由の時間を與へる。かういふやうにして、時間を割り當てる、兎に角時間を正確に使つて行くやうに導けば、自然に規律ある生活の習慣を養ふことが出来る。

親より手本を示せ

今日の兒童青年は矢張り我々と同じやうに、不規律に時間を使つて居ると思ふ、それに就いて注意するのは、別にむづかしい事ではないと思ふ、規律ある生活を苦しくないやうにさせるのに最も必要のことは、兒童は周圍の人のする事を見て其の眞似をすることが八分である、人の生活を見て眞似るのである、猿は人の眞似をする

といふが、人も他の人のする事を九分までは真似て居るのである、或學者は人の發動は悉く真似をして居るのであると考へた程である、それで規律を兒童青年に守らせやうとしても、周圍の人が全く守らずに居ては、如何に喧ましく言つても効能がないと思ふ、されば出来るだけ、努めて我々自身も、規律ある生活をして、兒童青年に模範を示すことが必要であらうと思ふ。

家庭改良の必要なる所以

斯く今後は老若男女互に出来る限り家庭を改良し。總てに就いて規律ある家庭を造ることが必要であるが、中々家庭の改良は容易に

出来ぬ、一家の事を能く支配することが出来れば、天下の支配が出来一家の事を治むることか上手ならば、天下の事も上手に治むることが出来る。或人は言ふた、それ程であつて、家庭を一時に改良することは困難であるが、どうしても將來の日本の發展を考へれば、先づ第一に家庭生活を改良して、これまでよりも、一層規律あるものを造らねばならぬと思ふのである。

兒童青年の教育を放任すべからず

それから今日でも能く聞くことは、世の中に仕事して社會國家の事に心配する者は、兒童の教育などには、注意せずともよい。兒童

青年の教育は他の人に任して置いて、我子が如何なる悪友と交らうが、又如何なる悪習慣を作らうが、人に委して置く人がある、さういふ風では、規律の習慣を造ることは出来ぬ、それで今日公共の事業に従事して忙しい人は、他人に頼んで、児童の教育をして貰ふにしても、親のすることは児童が真似るので、平生より成るべく規律ある生活を手本として、児童に示さねばならぬと思ふ、通例英雄とか豪傑とか東洋風を唱へる人には、どうも不規律の生活をする者が多く、規律ある生活をする者は、英雄豪傑でないと思へて居るが、それは昔の事で、今後はさうでないと思ふ、西洋にも英雄豪傑はある

が、皆中々規律の立つた生活をして居る、今後先づ第一に、児童青年の教育上、將來注意すべきことは、両親が規律ある生活をする事を努め、其の實例を彼等に示し、成るべく早く其の習慣を養ふやうにすることであると思ふ。

度量を大にすべし

更に、今日我が國民に必要であると思ふことは、度量を大きくする事である、これは外國に永く在留して歸朝すると、第一に氣の付くことである、所謂考への小さなこと、俗語でいへば、總ての事にコセツクことである、日本の社會ほど、小さなことをやかましくい

ふ處は、世界中にないと思ふ、殊に亞米利加の如き、自由で寛大の風を見て居つた人が、日本に歸つて來ると、ひどく其の事を感じる、歐羅巴は亞米利加程大きくない、幾分か小さな事を喧ましくいふ傾があるが、日本では政治の事にしても、社交の事にしても、針のやうな事を棒のやうにいうて、總ての事を喧ましくいふ風である。

島國的根性を去れ

日本の社會には、小理屈をいふ人が非常に多くある、島國적이다、島國の卑屈根性で、政治上でも何事でも、成功すれば直ぐ悪く言つて、其の人を叩き抑へる、學校に於ても、或青年が少しく良

出來ると、直ちにいぢめる、四方八方より、いぢめ始める、一體物が良く出來るならば、獎勵して「君はよく出來る、もう一層御奮勵なさい」と、いふのが當り前である、一般の社會に於ても、商賣に上手であつて、金を儲ける人があると、如何に正直でも批難する、又官吏でも少し腕利きで出世すると、其人を罵る、又學者でも其人が何か發明でもすれば、直ぐ悪くいふ、かういふ風は、一日も早くなくして仕舞ひたいと思ふ、もう少し大きな心を持ちたいものである、今後は島國根性を抑へて、もう少し大きな心を持つやうになりたいと思ふ。

思慮緻密なれ

昔し小藩の武士は度量が小さくて何にも出来ぬ、大藩の武士は度量が大きい、随つて大事が出来た。恰も其の如くである、然し度量が大であるといふのは、唯だ大言壯語することではない、唯だ大きい事を人に語る者が大量の人ではない、随分緻密な考へを有つて、注意周到であつて、度量の大であることが必要である、實例を擧ぐれば、能く分る、英吉利のグラットストーンは非常に大量の人であつた、此の人は英國の宰相に幾度もなつた人で、古來肩を比べる人の少いほどの大人物であつた、乍併非常に緻密な思想を有つて居た

人である、總ての事に注意の行渡つて居た人であつた、偉大な事を考へて居たが、小さな事は構はぬかといふに、さういふ人でなかつた、大事を考へても、大言壯語はせぬ、又ナポレオンも大量の人であつたが、随分緻密の思想を有つて居つた、又ビスマルクも非常に大量の人であつて、同時に又非常に緻密の人であつた、さういふ例が世界には随分多くあると思ふ。

世界の地理歴史を授けよ

然らば、今日、日本人の度量の小さいのを、如何に改良すれば、よからうかといふが次に起つて來る問題である、此の事に就いても、

種々方法はあると思ふが、先づ一番利き目のあると思ふのは、世界の地理、世界の歴史を兒童青年に授けることである、無論我々は日本人であるからして、日本の地理歴史ばかりでなく、自分の一家の事を詳しく知らなければならぬ、無論自國の事を知つて、後に、外國の事を教へなければならぬが、自國の事を教ふると同時に、世界の大勢に就いて話し、世界の地理に就いて教へ、兒童青年の時代より不知不識の間に教化する必要がある、即ち談話の間に倫敦や巴里の話を爲し、亞米利加の話を爲し、英吉利の大學校、又其大人物の話を爲し、世界は吾々の仕事をする場所であつて、唯だ日本ばかり

が働く場所でない、我々は日本人であるので、日本の爲に盡すべきであるけれども、世界の舞臺で働かなければならぬといふことを、談話の中に吹込まなければならぬと思ふ、それから又天文の話し、太陽や星の話をして、其大さ、其距離等に就て話を聞かせて、兒童青年の思想を廣くすれば、不知不識、思想が大きくなると思ふ、又地質學の話をして、地球はかういふものであつて、かういふ風に出來たものであるといふことの話をするれば、日本も古いけれども、地球の出來たのに較ぶれば、新しい、少年の中より世界を人間各自の働く場所として教へ込まなければ、どうしても人の考は大きくなら

ならぬと思ふ。

氣輕に歐米諸國へ行け

一例を擧げていへば、近頃外國に行く人があると、送別會といふことが流行る、然しそれは必要のないこと、思ふ、外國に一年か二年行くのに、死に別れのやうにするのは、日本人の情の厚いのを現はして居ると言ふ人もある、然し其少量をも發表して居ると思ふのである、私は早くさういふ大騒ぎをせず、外國に行くやうにしたいと思ふ、外國に一年二年行くのを大層にするのは、日本人の狭き心を發表して居ると日本に居る外國人は見て可笑う思ふて居るだらうと

案ずる、英吉利より亞米利加に商賣に出掛ける人は、鞆一つを持つて紐育に向つて出立する、それを日本では支那へ行くとか朝鮮へ行くとか、甚だしきに至ると、東京の社員が大阪に轉任するにも、送別會をする、又二三十里許りある處に學生が修業に行くにも、送別會をすることがある、佛蘭西に行くにも、露西亞に行くにも、修業に出掛ける人は、送別會なしに出立する強膽の氣象を造りたいと思ふ、それには英吉利の話を爲し、佛蘭西の話を聞かせたりして置けば、青年は不知不識大きな感想を起すやうになつて、一度外國に行かねば、田舎者の如く考へるやうになる、それ故に私は將來の日本人の

爲に、世界が我々の働き場所であつて、世界に有益の事をしたいといふ思想を養ふやうにしたいと思ふ、歐米の青年は皆さういふ感想を有して居ると思ふ。

人の信用名譽を重んぜよ

今一つの弱點は、日本今日の社會ほど、人の名譽を重んぜぬ社會はないと思ふ、それはどういふ事であるかといふに、人に傷を付けるやうな噂をすることを、日本では一向構はぬ、人々互にアノ學者は無力であるとか、アノ醫者は下手であるといふことを、遠慮なくいふ、今後は信用が大切である、信用がなければ敏腕家でも、有力

家でも何の仕事も出来ぬ、それで人の信用を害し、人の名譽を傷けることがないやうに互に注意しなければならぬ、今日の日本はどういふものか知らぬが、人の名譽を重んぜぬやうになつて居る、それで人の長所を擧げて、人の名譽を發表するよりも、寧ろ人の短所を擧げて人を傷けることが多い、之を不知不識、兒童青年も真似て、人の名譽を害することを構はぬやうになつて居る、之は是非改良せねば、將來、日本の社會は進まぬと思ふ、これからは信用の世の中である、人々互に名譽を害するならば、どうしても社會が安寧に進んで行くことは出来ぬ、さういふ事は我々も能く注意し、且つ兒童

青年は、人の名譽を重んずる事を、一層強く感ずるやうに注意しなければならぬと思ふ、それなら如何にせばよいかといふに、それは、むづかしいことでない、我々が注意して成るべく人の名譽を害する如きことは、彼等の前ではぬやうにする、又是非言はなければならぬことであれば、成るべく其人の名を擧げずして、他の時に其話をする位に止めて置くのである、學校の教師の缺點を擧げるとが、醫者の缺點を擧げること抔は、別に利益なくして害あるのみである。以上の點を一括していへば、第一は日本の兒童青年をもう少し規律ある生活をするやうに注意して行くこと、次に日本人の少量なる傾

を改良すること、それから互に名譽を重んずる習慣を造ること、此の三つが刻下最も必要の事であると思ふのである。

第三章 質素生活の必要

現代國民に最も必要な生活

次に現代の國民生活上、最も必要なは、質素生活である、今日我國社會一般の傾向は、段々と奢侈に流れる方で、質素簡單なる生活をするものを、社會は笑ふといふやうになつて居る、それは將來甚だ憂ふべき現象であると思ふので、此の事に就いて一言せんと欲するのである。

平素より困難に應ずる準備

言ふまでもなく、一個人に取りても、一國に取りても、何時如何なる事に出會ふか分らぬのが人世である、一個人でいふならば、何時我々は病氣に罹るか分らぬ、又何時我々は負傷して、長く全快がむづかしいやうになるかも知れぬ、然しさういふ事ばかりを考へて居つた所で致し方がないので、平素注意する所がなければならぬ、それは不意の出來事に遇うて、非常なる困難に陥らぬやうに、豫め準備をして置くことである、之は何人も平生心掛けて居らねばならぬことである。

國家の將來に取りて危険なる傾向

前申す通り、今日は將來の事などを考へて、自分の生活又は一家の經濟其の他に就いて、質素簡單なる生活を實行する者は、世間より尊敬を受けぬのみならず、其の反對に反て笑はるゝといふ状態になつて居る、これは我國の將來に取りて、甚だ危険なる傾向であると思ふ、何故ならば、一個人の上より考へても、人は何時も百事意の如くに、何も彼も、其の好む所を實行して、放縱の生活をする時には、他日何か困難が起つて、非常の場合に遭遇した時に、到底それに堪へ切ることが出来なくなつて、所謂生存競争上、敗を取らねばならぬ結果となる、それ故に平素自分の生活上に質素を守つて、

非常の場合の準備を爲し置くといふことは、一個人の上にと取つても、大切なることであるが、社會上より考へても、何時凶年が来るかも知らぬ、何時洪水があるかも知れぬ、何時又地震があるか判らぬ、さういふ事の爲に、常に我々は質素なる生活をして、萬一さういふ事のあつた場合の準備をして置かねばならぬ、勿論さういふことが必ず何時あると定まつて居るのではない、長く無かつたならば、誠に結構であるが、何時さういふ事があるかも知らぬので、其の準備をして置かなかつたならば、是等の難事が不意に起つて來た時には實に國家全體、社會全體が困難に陥らざるを得ぬ、これには種々、

經濟上よりも亦教育上よりも、法律上よりも準備があらうと考へる、爰にはそれ等の總てに就いて言を爲すのではなく、質素生活をして、道徳上より此の非常なる場合の準備をなし置くことが、今日の日本人に取て、實に必要であることを考へて見たいと思ふのである。

内外二様の出来事

抑此の社會に起る非常の出来事には、二通りの種類がある、即ち外部より來る出来事と、内部より起る出来事と、二つあるのである、疾病に喩へていへば、前者は外部より來る處のもので、外科的治療を要するものである、これはそれほど困難ではない、それでも

平素衛生上に十分注意せずして、身體が壯健でなかつたならば、外科の手術を行ふ時に、危険に陥ることがある、兎に角外科的のものは、それほど困難でないのであるが、内科的の病氣は、中々さういふ風に簡単に治療する譯には行かぬ、國家に於ても、外科的の困難と内科的の困難と二種ある、今日の如くに奢侈に流れて、段々と國民全體が贅澤生活をするやうになつたならば、終には不治の内科的病氣が、發生して來はせぬかと非常に心配する、それ故に今後我々は何處までも質素簡單の生活を續けて往く事を希望する者である。

質素生活と今後の注意 (1)食物

さて質素生活の精神は、昔も今も同じであるが、今後の質素生活は、過去時代、未だ學術などの進歩して居なかつた時分とは、少しく趣を異にしなければならぬと思ふ、質素生活といふことは、昔も今も同じで、何時も社會の健全なる發達の爲に必要であるが、其の方法が時勢に由て、多少變化して行かなければならぬと思ふ、人の生活には種々の方面があるが、其第一は衣食住の事である、衣食住の上に今後の生活はどういふ風に質素といふ事を守らなければならぬか、どういふ側に簡易なる生活をせねばならぬが、兎角質素といふと、粗食して、不潔なる衣服を着て居なければならぬといふ風に

考へる人があるが、今後の質素生活は粗食ではない、勿論身分不相應なる食物を食することは別の事であるが、今後頭腦を働かせて社會に有益なる事業に従事する者は、其の身體の健康を維持して往々に、どうしても食物に就いては普通通りに唯だ漬物と粗飯をさへ食つて居れば十分といふ譯には往かぬと思ふ、唯だ手足のみの労働をして居る者は、梅干と香の物ばかりでもよいかも知れぬが、身體と共に精神を働かせて、世の中の爲に盡す者には、それではどうしても足らぬ、身分不相應の食物を食ふことは、勿論賛成せぬが、日本人全體の現状より考へて見れば、食物の方は少し進めなければなら

ぬと思ふ、若し昔日の粗食を奨励したならば、到底日本人の身體は、今後の仕事に堪へなからうと思ふ、壯年の時分には、それに堪へられるとしても、四十歳五十歳になれば堪へることが出来ぬ、隠居でもしなければならぬ状態に陥つて仕舞ふであらうと思ふ、五十歳よりも六十歳、六十歳よりも七十歳の方が、人生の経験に富み、社會に有益なる人物であるといふ風に、健康を維持して、國家の爲に盡すには、食物の方を餘りに粗末にすることは、誤まつて居ると思ふ、それで食物に就いては餘り粗食せよといふことを奨励する必要は、今後の日本の質素生活には必要でないと思へる、寧ろ滋養のある物、

消化不良でなき物、身體の健康を保つ上に必要の物を食せよといふことを奨励しなければならぬと考へる。

同じく (2) 家屋

次は家屋の事である、即ち衣食住三者中の住家の事である、今日の日本の家屋は、健康其の他の點に改良を要する點が少くないと思ふ、乍併是は中々大金を要することであつて、一時に實行する譯には行かぬ、又必ずしも西洋風の家が日本に適して居るといふ譯でもないのである、それで俄かに改良するに及ばぬと思ふが、今少し衛生上には注意せねばならぬ點が少くないと思ふ、先日醫士に就いて聞い

たことがある、それは日本には肺病患者が非常に多い、何とか今少し之を減ずる方法はなからうか、之に對して種々の説もあつたが、一の注意すべきことは、家屋の構造が善くないので、風を引く者が實に多い、それから夜間は冷えるので、それが肺病に罹る一の原因になつて居りはせぬかと考へる、何とかモウ少し家屋の構造を變へなければ、此の病を防ぎ切れぬ、此原因より段々肺病患者が殖へて來ぬかと考へるといふ話があつた、之は一個の人の意見であつて、必ずしも多數の醫士の説ではないかも知れぬ、然し兎に角日本の住家は今後改良を要する點があると思ふ、住家などはどうでも宜い、

如何に風が這入つても構はぬ、唯だ雨がかゝらねば十分であるといふ譯には、今後は往かぬ、家屋の事は今日の儘で何時迄も進むことは、不得策であると思ふ、殊に肺病の傳染する重なる原因は、一つの部屋に其の患者と一緒に寝ること、一人の人が肺病になると、それが親より子にうつり、兄弟にうつることとなる、どうしても部屋の数殖やさなければならぬといふことも聞いた、さういふ點より見れば、どうも家屋の事も、今日より一層粗末にするとか、今日よりも簡單にするといふことは、到底出來ぬことであらうと考へる、之を強めて實行したならば、種々の病氣が殖えて來ることであらう

と思ふ。

同じく (3) 衣服

それならば、衣食住に就て何を簡單にすべきかといへば、私の見る所では、日本の今日の富の程度に照して、先づ第一に健康に差支なく、簡易生活を爲し得ることの出来るのは、衣服であらうと思ふ、衣服は勿論人の身分によりて同じてない、地位の高い人が労働者の如き粗末なる衣服を着て居る譯には行かぬ、假令其の衣服を求むる上に別段金銭上差支がないにしても、自分の地位、身分といふものに不相應なる衣服を着て居ることは宜しくない、所で今日社會全體

の傾向に就いて考へて見るに、日本人の生活は、衣服に就いて法外に奢つて居ると思ふ、奢侈に傾いて居ると言ふてよい、美服でなくとも、別段病氣に罹る危険はない、勿論不潔なるものは宜しくないが、洗濯すれば清潔にすることの出来るものであれば、此の點に於ては質素生活をして、何も別段に不都合はないと考へる、方今は衣服に就いて一般が餘程奢つて居ると思ふ、其の譯は今日中流以上の日本人は、概して二通りの衣服を有つて居る、西洋服と和服とを有つて居る、それ故衣服に殆ど二重の費用を費して居るのである、のみならず、衣服が粗末であると、社會へ出ても頭が上らぬ傾に、

段々なつて来る、それが爲に身分不相應なる衣服を着けて居る人が澤山あると思ふ、殊に女子に至つては、立派な衣服がないと、社會に出られぬやうになつて居る、如何に元は賤しい職業をして居つた婦人でも、立派なる着物さへあれば、何處へでも出られる、如何に教育があつても、立派なる服装がなければ何處にも出られぬ、出れば笑はれる、或は主人の名譽に關係する、かういふ風に衣服に就ては、社會が段々華美に走りつゝあると思ふ、加之中流社會の者にして、昔の人の着て居つた着物では、満足して居らぬ、昔の大名の如き衣服を皆着て居る、今日の中流社會でも昔の中流社會の着物

で差支ない、昔の中流者は、仙臺平の袴は滅多に着けなかつた、小倉袴で濟して居つた、今日はそれでは濟まぬ、今日は、昔の殿様の服を着て居る、又身分の低い人になると、衣服で社會に頭を出すといふ考へを有つて居るので、猶ほ猶ほ其の方には費用を掛ける傾になつて居ると思ふ。

同じく (4) 裝飾品

それから衣服の華美ばかりではない、衣服だけならば其れ程の事はないが、それに種々の附屬品がある、例へば時計、指輪其の他色の物がある、時計にしても、金の時計を持つて居らねば、何か體

裁が悪い、何か重味が付かぬやうに考へて、月給は三四十圓より取らぬ人でも、時計は百圓位の物を持つて居る者がある、其必要は少しもない、金時計を持つて居つても、健康に影響はない、時間を測るには、ニツケル時計でも金時計でも、たいした違ひはない、或時田舎に演説に行つた時、私はニツケル時計を持つて居つたので、中島博士の時計は、ニツケルであるといふことを新聞に書かれた、ニツケルの時計を持つて居るのを不名譽のやうに思つて、金時計を持つて居なければならぬやうに、新聞に書かれた、是等の點に於ては、餘程生活を簡單にして質素生活が出来ると思ふ、又人によつては香

水をつける、病人で人の中へ出るには、香水でも付けねば出られぬ人もあらう、さういふ人は別であるが、さうでない人は、別段に香水をつける必要はなからうと思ふ、香水其物は有害物ではないが、丁度昔し或人が銀の烟管を一本貰ふたので、それに釣合ふ火鉢を造らねばならぬといつて、之を造つたり、萬事それに釣り合ふものを求めて、終に身代を潰したといふ話がある、それと同じやうに、香水を付けると、人は其の氣になり、金時計にしても指輪にしても、香水と釣り合ふやうにすることゝなる、香水などは男子には別に必要がないと考へる、亞米利加や英吉利の如く、富んだ國民では差支

ないが、今日の日本には、さういふ餘裕はない、各々薄給で働いて居るのである、それで今述べたる如き奢侈贅澤は、何等の利益もなればかりでなく、却てそれが爲に風紀を紊す結末を生じて来る、中流の者は、常に此の點に就いても、注意しなければならぬ、上流の人々は、國家を代表することもあり、國家の體面上、幾分衣服杯でも注意する必要がある、然し我等中等の人民は、粗服でも決して國家の耻辱にはならぬ、質素生活をして、何の差支もない、此の外にもまだ衣服に關して述べたいことが多いが、特に一言するのは、社交上の質素といふ事である。

同じく (5) 社交上の心得

人間は、社會的動物であるので、成るべく多くの人と交つて、知識を廣め、又互に懇親になることは、極めて有益でもある、故に努めて自分の本務を害せざる限りは、人と交はるべきである、而して此の社交は、成るべく簡單質素である方がよいのである、殊に日本の今日の如く、經濟上裕かならざる人民は、此の點に就いて注意しなければならぬのである、所が此の點に於て今日の日本人は外國人よりも交際費が多いと思ふ、西洋にも、善事あり悪事もある、萬事西洋を褒める譯ではないが、此の交際の事に就いては、西洋の方が

餘程善いと思ふ、西洋人の社交は、眞の交際であつて、知識を廣め、懇親を圖り、飲食などは目的になつて居らぬ、日本人の社交は、飲食が主になつて居る、十分に食物がなかつたならば、招かれても喜ばぬ、折角遠方より來たのに、粗末なる物を食はせたといふ風に、社交にも飲食が目的になつて居る、飲食必ずしも悪い事ではないが、社交上に必要な賤しき婦人を雇ふ事もある、それは眞の交際ではない、反て其妨げとなる、折角交際しやうと思ふ人と親密に談話することが出來ぬ、それで交際の目的は達せられぬ、此の如き事は、費用の上より考へても、實に無益である、又社交の點より見ても、

目的が達せられぬと思ふ、今後の日本の社交は改良を要する、殊に前にいつた通り、費用がかゝる爲に交際はしたいが、それが出來ぬといふ結果、社會より退隱して、社交に出て、廣く人に接せぬやうになるのは、甚だ遺憾の事である、それが爲に知識も進まなければ、親友も殖えず、爲に種々様々の不利益を各方面に生じて來る結果になると思ふ。

同じく (6) 虚飾を去ること

尙ほ社交に因みて今一つ述べたいことは、人を訪問する時、東京などでは、男子には少いが。女子は必ず土産物を持つて行かねばな

らぬ、土産物も簡單なる物で濟めばよいが、或社會では中々の費用が掛る、其の結果女子は世間が狭くなり、世事に段々暗くなる、それが育兒上にも影響し、家政上にも影響し、種々の不便を生ずるやうになる、さういふ事も、何とか改良するやうにしたい、特に進物をするのを見るに、贈物が其人に對する親切より出て居るのでなく、寧ろ贈物で何かの報酬を釣り出さうといふ傾で、所謂鰥で鯛を釣る手段である場合もある、さういふ贈物は、貰うても餘り有難くない、粗末なる物でも、眞に心より思うて贈るものならば、實に難有く感ずるのであるが、其の贈物で、何か報酬を釣出すといふ目的である

と思ふと、如何に結構なる物でも有難くも何とも思はぬ、目出たい事にしても、又悲しい事にしても、眞の意思を向ふに通じ、敬意を表し、同情を傳へることが、確かに出来る方法を考へて、濫りに金高い物を贈るとか、濫りに人の目に着く物を贈るとかいふ風の事を廢したいと思ふ、葬式にしても、死んだ人に花を贈り、敬意を表すのか、葬式の時に擔いで往つて、誰某が立派なる花を贈つたといふことを示す目的であるのか分らぬ如き事が、東京などではよくあるやうに思ふ、さういふ事は別段に健康上にも知識上にも、何の得る所もない、富が多くあつて用の方のない國であれば、何とも苦情の言

ひ方はないが、さうでなく社會に有益にして、爲すべき事を澤山持つて居る國では、成るべく必要のない事には、儉約をして有益の方に向けるやうにしたいと思ふ。

鄙鄙を通じたる奢侈の弊

此の頃の社交上には、昔の封建時代の社交に及ばぬ事が澤山ある、我にはそれを復活したならばよからうと思ふ事もある、兎に角今日の東京などの風は、全體が奢侈に流れる方であつて、何事に付けても、無益の事が多くある、近頃自分の経験したことをいへば、或日或邸へ電車で参つた、或點よりいへば悪かつたのでありませうが、

それが爲に非常に冷遇を受けた、車に乗つて行くか、馬車に乗つて行くと、鄭重に扱はれたに相違ないのであるが、歩いて手着物を提げて参つたので、又衣類が粗末であつたので、無心にでも來たと思はれたのであらう、今日は電車を利用して簡單生活をしやうと思ふと、顔に泥を塗らるゝやうな目に遇ふのである、萬事其の通りで質素生活をする者は、却て人より悪く言はれ、且又粗暴なる取扱ひを受ける、又自分が或地方へ旅行をした時、粗服を着て居たので、旅館に行つた處が、臺所の隣りの三疊敷の不潔極まつた部屋に案内された、其の向ふの方に、大きな部屋があつたので、それに變へて貰

いたいと言つた所が、向ふの座敷には東京の御客がおりますといつて斷られた、そこであれは何某殿かと尋ねたら、赤十字社の御役人との返事であつたが、其人は集金者でありました、之は私の着物が組末であつて、金時計を持つて居なかつた爲であつた、地方でも大分奢侈の風が傳染して居るやうに思ふ。

質素生活の効果

質素生活は、要するに多くの點に於て、品性修養上、効果があると思ふ、修養上誰も困難を感じる點は、兎角自分以上の人を見て、不平に思ふ事である、其人の生活を見て、自分の生活の低い事を感じ

じて、詰らぬと思ふことである、然し之は自分の地位身分を忘れるので、さういふ感じが起るのであつて、我々自身の地位身分を考へて見れば、少しも我々の爲して居る生活で不平の起る譯もなければ、何もない、此の不平といふことが不平其もので止まつて仕舞へば、何事も害はないのであるが、不平といふことは、種々様々の物を産出して来る、上の人を見て不平に思ひ、何か勞せずして金錢を得て、自分もあのやうに生活して見たいといふ考へが起つて、則ち僥倖心が起つて、相場をするとか、競馬に賭をする、又さういふ事をせぬ人は、不正の事をして金を取る、墮落の本は、自分の身分を忘れて、

不平に感ずる處より起るのである、若し我々が自分の地位身分を考へて、質素生活をして居つたならば、不平は起らぬ、従つて不平より生じて来る種々の墮落の種はなくなつて仕舞ふであらうと思ふ、加之質素生活を實行する事は、家庭に於て育兒上に必要であると思ふ、質素生活をして居なかつたならば、子女に質素の精神を吹込んで、彼等を質素生活に導くことは出来ぬ、一家の經濟より考へても、世間の風紀上より考へても、質素生活は、非常に多くの利益を與へると思ふ、殊に今日社會の進歩と共に、社會が實業的になり、社會が段々拜金的になり、犯罪が非常に殖えて来る、不良少年が年々殖

えて来る。此の不良少年の増して来ることを防禦する一の有効なる力は、兩親たる人々又兒童を教育する人々が、質素なる生活をして常に訓戒を彼等に加ふるばかりでなく、自分の質素生活によつて、彼等を導くならば、彼等も不知不識の間に、其の感化を受けて不平を感せず、自分の地位身分に相應したる生活をして、其の本分を全うする精神を起して来るであらうと思ふ、其の精神が兩親或は教師たる人に現はれなかつたならば、如何に學校で修身教授をした處が、如何に立派なる修身上の書物を買つて讀ませた處が、十分の效能はないと思ふ、是等の方面より考へても、質素生活とは、非常に必要

であつて、將來我國が非常に富んだ國になつたらば兎に角、今日の經濟上不如意の状態に於ては、此の質素生活といふことが焦眉急の務であらうと思ふ。

第四章 青年と生活問題

學校卒業生の苦心

次には青年の生活問題に就いて一言せねばならぬ、學生生徒が學校を卒業して社會に出ると、直に起るのは生活問題である。今までは相應な學資を父兄より得て、生きて來たものが、今後は一本立となり、獨立自活の途を辿らねばならぬ、然るに近年各學校の卒業生が増加し、彼等は争うて職業地位を求め、之が爲には、容易ならぬ苦心を嘗めるのであるが、中々良い口はないやうである。近來青年

の口より、往々生活難の聲を聞き、パン問題の解決を叫ぶのである、其の結果或は不健全なる思想に煩悶懊惱し、先輩に向つて、往々簡単に其の解決を望むものなどもある、然れども人生問題の如きは、頗る廣汎複雑なるもので、種々なる方面よりの研究を要し、決して簡単に解答の出来るものでない、又假令之を説明した所が、青年の能く之を實行し得ることでないと思ふ、故にかゝる大問題の解決は、暫く之を措くか、又は自ら畢生の力を擧げて、其の是非如何を研究するがよい、然し青年の生活問題は、當面の實際問題である故、爰に一言して置く必要があると思ふ。

青年の生活と時勢の變遷

青年の生活難に就き、第一に考ふべきは、時勢の變遷である、未だ世間が幼稚で、少數の學校より少數の卒業生を出して居つた時代とは、社會が新知識を有する人士を要すること急であつた、従つて學校を出たばかりの青年も、索めずして有望なる職に就き、高給で迎へらるゝといふ有様であつた、今より十五年二十年前の卒業生は學校を卒業すれば、直ちに自立自營に餘り困難はなかつたのである、所が近頃は其の當時と社會の事情が違つて來た、社會は大學や専門學校の卒業生よりも、一層知識ある人で満ちて居る、従つて彼等に

對すること、又昔日の如くでない、今は寧ろ主客轉倒して、卒業生の方で口を索めねばならぬやうになつて居る、今の青年が生活難を叫び、失望落膽するのは、畢竟此の變遷を知らずして、昔の幻を夢想して居る爲ではあるまいか、少くとも、卒業すれば容易に職に就き得る者、又紳士生活を爲し得るものと思ひ込んで居る故ではあるまいか、故に第一の問題は、かゝる幻想があるならば、之を取去るべきである、卒業は修養の證明でなく、寧ろ修養の今後にあることを意味するものである、自己の價の小なるを知らば、益々奮勵して之を得るの覺悟が必要であると思ふ。

生活の程度を省みよ

第二の問題は、生活の程度である、青年の生活難は決して絶對的のことでない、相對的である、其處に問題解決の餘地が存すると思ふ、如何に今日の社會が進歩したとて、國內最高の教育を受け、又専門の知識ある人士を容るゝ餘地のないことはない、注意して居れば、自分一個を糊口するに足る職業は、直に見付けられるのである、若し青年が卒業後直ちに有望の職に就くといふ如き幻想を去り低級の職に甘んじて就き、其の地位より徐に鍛ひ上げる決心にあらば、職業はいくらでもある、決して騒ぐに及ばぬ、米國の青年の

生涯を見るに、大學卒業後、多くは商店の雇者とか、賣手とか云ふ極めて下級の職に就くのである、日本では彼等に比すれば、まだまだ上等の方であると思ふ、現今の青年が生活難を説くのは、畢竟彼等に罪ありと思ふ、彼等が餘計の収入を欲するのは、贅澤生活を望む故である。

早く紳士たるべからず

一體、今日の青年は成功を急ぐ傾である、彼等は餘り早く紳士になりたがる、卒業後、未だ間もなき青年と、既に十數年を経たる紳士との生活を見るに、或は其の服裝に於て、或は飲食に於て、或は

其の他の生活に於て、往々餘り差異がないやうである、甚だしきに至ると、卒業後直ちに妻帯して家庭を作らねばならぬものと心得て居る者もある、かゝる生活は、固より充分の収入がなければ、實行し難い、然しそれが出来ぬとして生活難を囑々するは、餘り蟲のよ過ぎる話ではあるまいか、日本で青年が結婚を急ぐのは種々の事情もあれど、別に財産もなく、普通獨力にて自活すべき青年が、急いで家庭を有つことは、其人の爲にも、社會の爲にも、考ふべきことと思ふ、西洋の青年に、學校卒業後、直ちに妻帯する者は、富豪の子弟に限る、多數の者は前述の如き丁稚生活より、次第に經驗を積ん

で昇進し、十分の収入を得るに及んで、始めて結婚するのである、故に大抵卒業後十年位で、漸く妻帯する、之が米國では普通である、尤も長い間獨身で居ることは、悪い習慣に陥る機會を多くする嫌ひがある、けれども彼地の青年は大抵宗教的信念を有し、品行方正で、其の心配は少い、吾國の青年も、其の位の堅固なる品性を有するにあらざれば、到底駄目である、又青年男女間に戀愛關係の成立せる時の問題もあるが、米國の青年などを見るに、彼等は相互十分の見込がなければ婚姻などはせぬ、男子の方で申込んでも、女子は直ちに之に反問して、其の覺悟を問ふのである、故に若し男女相思の間

柄で婚約した時も、兩方の準備成るまで待つのである、而して米國男女の交際は頗る自由なれど、彼等が節操を認まる如きことは殆どなく、安心して其の約を守ることが出来る、又日本の青年には、卒業後往々父母に迫られて婚期を早くし、又は一家の經營をせねばならぬことがある、此の點に於て日本の青年は一層負擔を重くせられて居る、依て此の點より言ふも、贅澤生活は之を避けねばならぬ。

簡易生活を持續せよ

そこで第三の問題は生活の方法である、之は一言以て掩へば、卒業後と雖も、青年は須らくシンプル、ライフを續くべしといふこと

である、學校を出で、後のちも、數年は尙ほ寄宿舎生活を續け、質素生活を營んで、少額の收入しうにふでも、十分支へられるやうにしなければならぬ、日本青年の贅澤ぜいたくは、單に衣服飲食ばかりでない、交際費かうさいひ、會食費かいじふなど、必要ひつやうにあらざる支出ししゆつが多過ぎると思ふ、然し青年に質素簡易かんいの生活を營いとなましめ、其將來そのしやうらいのため注意せしむるには、先輩せんぱいも助力する所がなければならぬ、それは先輩の本務である。

青年と先輩の指導

米國べいこくでは先輩たる者は、大抵毎週青年の爲に家庭を開放して、彼等かれらに接し會談くわいたんするのが常である、青年が一日の勤務より歸り、顔を

洗あひひ汗を拭ぬぐひ、髪かみを櫛かみり、髯ひげを剃り、清潔なる下衣と襟えりとを着きけ、質素しつそながら折目正をりめ、たゞしき衣服に更へ、自分で磨いた靴はを穿はいて、相當きうたうな人の紹介狀せうかいじやうを持ち、知名の先輩せんぱいを訪問すれば、先輩も喜んで之を迎へ、或は青年の提出ていしゆつする問題に應答おうたふし、又は普通の談話を交換かうくわんし、一時間位で辭し去るのである、かくして種々なる方面の先輩を訪問する中には、或は其の苦心談を聴き、次第に見聞を廣くし、或は自分の才識力量人格さいしきりきやうじんかくを先輩に知らしむる機會を作るのである、家庭によりは、夫人令嬢も共に出で、款待くわんたいするので、家庭の和風わふうに接し、寄宿舎生活の單調たんてうを補うて餘りある、次第に親密しんみつになれば、晚餐に

招待さるゝことなどもあるに至る、尤も彼地では、訪問したとて、茶一杯も出さぬ、又晚餐に招いても、特別の御馳走がある譯ではない、彼等青年に取りては、唯だ先輩の磬咳に接し、又食卓を共にするといふことが、非常なる光榮である、又先輩も其の爲には努めて門戸を開放する、唯だ我國に於ては、學生が屢々先輩を訪問したり、又招待されたりすれば、兎角悪評を其の友人より受けることがある、又訪問しても上述の如き先輩の態度では、青年が満足せぬ、更に多くの款待を期したりする故、之を實行するには、青年の側にも、先輩の例にも、多少の困難があるに違ひない、又日本の現状では、先

輩などが、學生青年の爲に、進んで十分に會談する餘裕がない、何となれば今日の先輩などは、種々の事情があつて、終日働かねばならぬ、夜分宅へ歸りて後は、次の日の準備を爲さねばならぬ、従つて夜間も社交に使ふことが出来ぬのである、之は先輩其人の爲にも、社會の爲にも、甚だ歎すべきことである、何とかして、今後は、此の餘裕を見出さねばならぬと思ふ。

青年自身の解決を要す

要するに以上述べた如く、當面、生活問題の解決は、先づ青年自身の上にある、現代は所謂過渡時代で、日本の舊社會が次第に變化

して、新組織、新制度が發展しつゝある時代である、青年は此の面目を異にしたる新社會に生活し行くもの故、自ら此の社會の適者となるにあらざれば、優勝者となることは出來ぬ、社會の調子が變りつゝあるのに、之に處する人の方で、何時までも舊態を持すること
は出來ぬ、其の爲には、之に適當なる法則條例に準據せねばならぬ、吾國の今日の生活は、まだ歐米に比して數倍も容易である、教育ある青年は、尙ほ多くの良職に就くことが出来る、唯だ今少し其の生活を質素簡易に爲し、時間を有益に費し、先輩の指導に従ひ、又節儉を心掛けたならば、決して生活難を説くには當るまいと思ふ。

青年は眼界を廣くすべし

新卒業生が職業を得るにしても、中央都會に於てのみせず、眼界を廣くし、地方に求むることが大切である、殊に我國現今の時勢は、膨脹的で、朝鮮滿洲は皆其の手を下すべき好舞臺である、對岸の米國にせよ、支那にせよ、教育あり、品性ある青年を拒むことは決してない、否な却つて此の如き青年が、進んで行かねばならぬ、歐米青年の中には、赤手を振つて、深く蠻地に入り、開墾や教育に従事する者さへある、天下は廣い、人生到る處に青山あり、有爲の青年は、何處でも歡迎される、先年來遊せるラッド博士は、日本の青年

を以て、世界に最も幸福で且つ好望の地位に居る者といはれたが、これ眞に聞くべきの言であると思ふ。

第五章 我國の婦人と經濟

忙しい世の中

世の中が進むに従つて、忙しくなり、銘々の仕事も多くなるので、時間の經濟、即ち無駄に時を費さぬやうにすることは、男女共に大切である、殊に文明人は、教育を受けるにも、又受けて後働くにも、此の心掛なき時は、餘程損をせねばならぬ、蓋し人の生命は限りあるものであれば、其の大切な時間を一度失へば二度と取戻すことは出来ぬ、他の物は一度位の餘計費つても、何時かは取戻すことが出

來るが、時間は定まつた分量であつて、一度失へば最早取戻すことは出来ぬ、例へば働く時間は大抵これだけ、眠る時間は約これだけと、生理上チャンと定まつて居るものを、我から強ひて滅茶苦茶にし、眠るべき時に遊び歩き、働くべき時を空しく過して仕舞つたならば、其の無意味に失はれた時間は、長へに恢復することは出来ぬ、のみならず、自然に定まつた時間の分量を誤まつた結果、仕事の効果が擧らず、或は心身を害して、哀れ病床にあぢきなき月日を送らねばならぬこととなる、そこで平常時間を規則正しく守り、經濟的に費すことは、忙しい世の中には、最も必要である。

能く働くも甲斐なき婦人

所が世の中の人は、儉約といへば、唯だ衣食住の簡略即ち費用を省くことゝばかり思ひ、時間を經濟の中へ入れて居らぬ傾がある、殊にそれが婦人に多いやうである、婦人のする仕事は、男子のやうに、一定の場所で、一定の時間に、一定の職業を毎日毎日するのでなく、時々刻々に起る雜務に追はれ勝であるので、餘程注意して時を使はぬと、つまらぬ事に時間を取られ、何をするともなしに、一日を過して仕舞はねばならぬ、そこで日本の女と西洋の女、例へば英吉利や佛蘭西、獨逸、亞米利加などの中等社會の女と比べて見る

に、働くことは日本の女の方が優つて居る、實際我邦の婦人は、正直でよく働かれる、女中でも比較的に餘計の時間働き、身體も多く勞するのである、然し仕事の分量、即ち一日若くは一週間に成し遂げる分量を比べて見れば、我邦の婦人は、到底西洋の女に叶はぬ、獨逸の女は、日本の女よりも、二倍、三倍の働をする、即ち日本の女なら、二人か三人掛つてする仕事を、獨逸の女は一人で辨ずる、これは中等社會に就いての比較であるが、日本の上流の家庭生活に比すれば一人で日本の女の五人分の働をして居るであらうと思ふ。

婦人の勞力省かるゝ時代

何故西洋の女は、日本の女よりも、數倍の働があるかといふに、一は便利なる機械が揃つて居るからである、例へば室内の掃除をするにも、バタ／＼掃かすに、巧みに塵を吸ひ取る機械がある、洗濯でも何でも、總てがこんな風で、勞力を費さずに出来るやうになつて居る、此の便利なる機械の整つた所は、米國が第一であるが、其の他の諸國、英國でも獨逸でも、米國ほどではないが、我邦よりは遙かに整つて居る、無論かういふ機械は値段が高い、掃除をする機械にしても、従來の箒などに比ぶれば、十倍も高價である、然し段段さういふものが廣まつて、家庭内の勞力は、今後益々省けるので

ある、東京にもシンガミシンなど、いふ、手で縫ふよりも早く出
 来る機械が輸入されて居るが、値段が高いので、まだ誰でも使へる
 といふ譯には行かぬ、然し國の富が増すに従ひ、すべてかういふ機
 械が、外國よりも輸入せられ、又日本に於ても發明せられて、婦人
 の勞力は著しく省かれ、仕事の分量は、却つて増すので、今日三人
 の女中を雇つて居る家も、一人で間に合ふやうにならう、又ならぬ
 ばならぬ。

省かれた時間の善用

然し茲に注意を要することは、斯く便利なる機械があつて、時間

も省け、労働を有効にすることが出来ても、其餘つた時間を他に
 轉じて、有益に費す工夫をしなければ、一家の損失は言ふま
 でもなく、延いて一國の損失とならう、即ち仕事は樂になつても、
 一家一國の經濟には、何等利益を及ぼさぬのみならず、却つて、高
 い機械を買ふだけの損となる譯である、されば便利なる機械が出来
 たならば、益々時間を貴重し、無益に費さぬやうにしなければ、か
 かる便利なる機械を使ふ效能はないのである、今日の弊は實に此の
 點にあるので、三十年前に比べると我邦でも餘程仕事の手間は省け
 るやうになつた、昔は洗濯をするにも、先づ桶に灰を入れて灰汁を

出し、それに浸して、ゴシ／＼洗つたものであるが、それが今日では洗濯石鹼といふ便利なるものが出来て、昔し一時間掛つたものを、今は十分位で洗へる、即ち日本でも昔よりは、仕事の時間は、大に省かれて居るのである、然るに女は相變らず年中傭配と忙がしい思ひをして居る、仕事の時間が減つたにも拘はらず、人數を減らすことは矢張り出来ぬ、昔し三人使つて居た所は、今も三人或はそれ以上使つて居るといふ有様である、これはどういふ理由かといふに、餘裕の時間はあつても、其の時間を無駄に費すからである、省かれて餘つた時間を、唯だボンヤリ使ふからである、これでは如何に使

利なる機械が出来ても、何にもならぬ次第である。

雑用に逐はるゝ日本婦人

歐米に於ける中等社會の女子の働き工合を見るに、彼國の女子は、身體を使ふと同時に、頭腦を使ふ、頭で物を考へて、無駄の時間を費すことが少ない、例へば人を訪問するに當り、歐米の婦人は、先づ一寸三分考へて見る、自分の出掛ける方面に何か用事はなかつたかと、それで若し用事があれば、出た序に片付けて仕舞ふ、故に一度外出すれば、其の方角の用事は悉く辨せらるゝのである、然るに日本に於ては、婦人が外出する場合には、唯だ一圖に、一直線に

目的の處へ行き、途中辨せねばならぬ用向があらうがなからうが、一向そんな事には頓着せぬ、従つて其の他の用事を果すには、又新に出直さねばならぬ、かくして年中それからそれと、追はれくつて、一度で済む事は二度も三度もする、つまり萬事二重三重の仕事をして、そして忙がしがつて居る、彼方へ行き此方へ行き、餘計に身體を勞して餘計に疲れ、而も其の効果は極めて少く、西洋婦人のする三分の一乃至五分の一の結果しか得られぬといふのは、何と情ないことではないか。

心の働きの大切

それも無智の下等社會の婦人ならばまだしも、教育ある中以上の婦人ですらも此の弊を免れぬ、例へば女中を使ふにしても、序に命ずれば一遍で済む事を、別々に二度も三度もさせる、使にやつて何を買つて來いと命じ置き、女中が其の通り物を買つて來れば、又何か思ひ付いて、何がない何を買つて來いと、而も先に行つた同じ方角に又女中を走らすといふ風で、頭腦を働らかせて序に種々の用を纏めて命ずる思案が足らぬ、それで柔順にして愚かなる下女は、唯々として主婦の命令に服従し、何等不平の顔もせぬ、下女は唯だ機械的に「あやつり人形」のやうに働くのである、これはどの家庭

にでも悉く然りといふのではないが、女學校出の婦人の家庭などに反つて此の弊が多いやうである、斯の如くして、日本の婦人は、手足ばかり苦しい働をして居るのである、今少し頭腦で計畫し、此の事の次には、之をする、此の事をする序に、アノ事をするといふ風に、萬事を取扱へば、今日の如く手足を勞せずして、仕事の効果は却て擧るのである。

女子の地位を高めよ

實際よりいへば、日本の女は正直で能く働く、けれども、其の仕事の仕上げ高は、遙かに、西洋の女に劣つて居る、此の原因は、彼

國には仕事するに、便利なる機械が整つて居る事、女子は唯だ人の命令によつて働くのでなく、自分の頭腦で考へてすることは、前に述べた通りである、それならば、何故我邦の婦人は、考へて物をしないかというに、根本の原因は、小學教育時代より、女は唯だ自分の長者、目上の人の命令に従つて行動するのみで、自分で用事を考へて、それを成るべく早く片付け、其の餘りの時間を、自分の修養に利用するといふ風に教へ込まぬ爲めである、即ち小學教育より唯だ機械的の詰込主義に失し、思考力を養ふことに、意を用ゐぬ爲めである、女子を教育する上に、今少し思考力を使ふ方法を執らねばな

らぬと思ふ、さうでなければ、労働の經濟も、時間の經濟も、出來ぬ、唯だ何時も忙がしいくで暮して、自分の知識を進めることが出來ぬ、ツマリ始終定まつた雜用に疲れて、毫も女子の地位を高める望みがない。

思考力の練習

さて日進月歩の世の中にあつては、何事にも新工夫が必要である、主婦として一家を處理するにも、若し新工夫、新案といふことが更になく、只だ昔の儘を繰返して居るやうでは、世の進歩に後れて仕舞ふ、所が我邦では、この新工夫をするとか、新に案出するとかいふ

練習が缺けて居る、殊に女子の教育に於て一層其の感を深うする、我國の教育が思考力の練習に缺けて居ることは歐米、諸國の教育を観察して來た大多數の人の、異口同音に唱ふる所である、日本の教育は、短時間に比較的多く教へる、此の點は西洋も及ばぬ、然し思考力の發達して居ることは、我國は到底西洋に叶はぬ、西洋人は考へる力が發達して、夙に初等教育より、此の方面の練習に努めて居る、男子の教育も同じであるが、女子の教育は特にさうである。

年齢と共に進歩せよ

西洋の女は幼少の時より、物を考へてする、自分で工夫するやう

に教へ込まれて居る、それで一寸家庭内の仕事をすることも、早く巧みに片付けて、其の餘つた時間を、自分の修養の爲に使用する、此の心掛があるので、縁付いて後も、讀書を廢せず、従つて知識も發達し、人格も高くなるのである、時勢に後れることもない、然るに我邦の婦人は、唯だ朝より晩まで、雑用に追はれて、自分の修養に資する餘裕がない、それならば仕事の分量でも餘計上るかといふに、成績は却つて西洋の女に劣るのである、かく忙しい人は忙がしいばかりで、修養の餘裕がなく、遊んで居る人は遊んでばかり居て、修養の心掛がないので、僅かに學校で習つた事以上に、知識の發達

も著しからず、年を取るばかりで、何等の進歩も認められず、果は時勢に後れて、一種の落伍者となつて了うのである。

今の婦人と昔の婦人

これといふも、小學教育より、其の方法を誤まつて居るからである、即ち教育の仕様が悪い爲である、尤も我邦でも、昔は教へる學課も少く、生徒も考へる餘裕があつた、今日では修める學課が多くなつて、自然詰込主義に流れ、生徒は生嚼りにポンヤリ物を覺えるだけで、自分で能く味ひ、考へるといふことをせぬので、思考力などは殆ど發達せぬのである、昔は習字でも算術でも、乃至裁縫の如

きでも、唯だ習ふばかりでなく、自分で工夫し改良するといふ風があつたが、今日の女子は唯だ習ふばかりで、これ以外には何等の融通も利かぬ、要するに考へる、工夫するといふことは、昔の女よりも劣つて居る、家事経済でも、豫算を作る事は、昔の方が一般に進んで居たやうに思ふ、唯だ今日は學校で、形式的に習ふのみで、應用の才は殆んどない、畢竟教育が適切でないからであると思ふ。

男女の懸隔

今後世の中が忙がしくなるに連れ、一家を處理する上にも、敏捷といふ事が大切になつて来る、仕事を敏捷にするには、時間を最も

經濟的に使はねばならぬ、それには簡便なる器械も入るが、然し、其の上に何事にも考へてする、新に工夫するといふ精神が最も必要である、身體を働かすと同時に頭腦を使ふ事、これでなければ、女の務は益々苦しくなつて仕舞ふ、終に器械的に體を働かすのみでは、疲れるばかりで、男子と共に一家を治むる上に調和を缺くのみならず、一國の經濟を裕かにすることも出来ぬ。又女子がかく雑用にはばかり追はれて、修養の時間を得作らぬやうでは、男女の懸隔は愈々甚だしくなつて、健全なる文明を形造ることは甚だ困難である、兎に角婦人も、今少し時間を經濟的に使つて、仕事の分量を多くし、

一方には、其の餘れる時間を利用して、自己の修養に資するほどの心掛があつて欲しいのである。

萬事大ざつは

此の間或西洋人が私に向つて、

日本の人は、やれ慈善事業だの何のといつて、寄附して呉れと申されますが、人に慈善を乞ふ前に、今少し節約したら宜しいでせうに、

といつた、實際我國は金の少ない割合に萬事が大ざつばである、一例を挙げれば、西洋では汽車の中、若くは公園の隅々に必ず一定の

入れ物が置いてあつて、乗客や散歩に来る人の、読み捨てる新聞を投げ込むやうにしてある、其の新聞をどうするかといふに、皆孤兒院へ與へ、憐れむべき孤兒は、それによつて教育を受けるのである、日本でも汽車中に、毎日拾ひ集むる新聞紙は、非常なる分量に上るといふ事である、何か有益の事に之を使つたら、宜からうと思ふ。

獨逸の成功と勤儉

獨逸では、食時中可成バタを無駄に使はぬやうに注意して居る、若し各人の小皿にバタが少しでも残つて居れば、一々ナイフでそれを掬ひ取つて寄せ集め、やがて他の差支ない場合に、それを使ふ、

日本でそんな事をしたならば吝嗇だ、不潔だといつて非難するであらうが、獨逸では一向平氣である、二十年前に私が獨逸に居つた時分では、學生が人より手紙を貰ふと、我々日本人のするやうに、直ぐ状袋を破らないで、先づポケットからナイフを取出して、叮嚀に隅の方を裁ち、状袋に四方に切り擴げてそれを、作文の下書に用ゐて居るのを見た、教師の前に出す時は無論白紙に認めるが、かく一枚の状袋でも、有益に利用するのは、畢竟多年の教育の效果である、即ち獨逸は佛帝ナポレオンの爲に惱まされて以來、所謂臥薪嘗膽で復讐を期し、國民は非常の節約を行つて、専心國の富を増さんこと

を圖つた、軍備を擴張するには、金が要る、其の軍備に充てん爲に、國民擧つて節約したのである、而して千八百七十年即ち約五十年目に、佛蘭西に復讐して、愈々本望を遂げた、つまり五十年間の教育、言ひ換へれば、二代に亘る教育によつて、其の目的を達したのである、獨逸は元來不毛の地多く、殊に北方に於て甚だしい、それに拘はらず、國運の伸張の目覺しいのは、國民の勤勉節約の賜である、獨逸の女が時間を經濟的に用ゐて、日本の女の三倍乃至五倍の働をするのも、多年の教育の結果である。

日本婦人目下の地位

翻つて我邦の婦人を見ると、勉むべき事を如何に勉むべきかを知らず、節すべきを如何に節すべきかを知らず、唯だ無暗に働くものか、然らざれば安閑と無爲に暮して、虚榮に馳せて居る者が多い様に見受ける、例へば、電燈は調法なるものである、ランプのやうに掃除する手数も入らず、面倒でない、實に時間の經濟上結構なものである、然し我邦の婦人は、未だ電氣の貴いものなることを知らぬ、殊に下女に至つては一層甚だしい、西洋では、下女でも知識があるので、電燈を使ふに、一分間も無駄にはせぬ、然るに日本の下女は、電氣を空しく費し、平氣に他の用をして居る、それで電氣を消費す

ること意外に多く、非常に不經濟になつて仕舞ふ、若し主婦が之を喧ましくいふと、下女はうるさがつて、出て行つて仕舞ふ、手も付けられぬ有様である。

山出しの下女は、田舎に居て、安い悪い醤油ばかりダブ／＼使ひ付けて居る爲に、東京に奉公に出ても、田舎のよりも十倍も値段の高い醤油を、相變らずダブ／＼と惜氣なく費ふ、今日の電氣の使ひ方は、恰度山出しの下女が醤油を使ふのと同じ格である、こゝに電氣の例を引いたが、一事が萬事で、必ずしも電氣に限らぬ、あらゆる事が皆此の流儀である。

子供の教育と我國の婦人

子供を育つるにも、我國の婦人は、唯だ徒に心配し、徒に苦勞するばかりで、頭腦で考へて、することが少ない、従つて、十分の効果を奏することが出来ぬ、唯だ無意識に、本能的に愛するのでは、善良なる子女を得ることは困難である、不良少年の多くは、かゝる乳母育ちの子女に多いのである、要するに我國の婦人は、正直で眞面目に事を爲すけれども、頭腦で考へて、參酌することを知らぬ爲に、あらゆる事柄に於て、餘程損をして居ると思ふ、若し日本婦人に毎日一時間、經濟的に仕事をしたならば、二千五百萬の婦人が、

國家經濟に及ぼす影響は、其の結果甚だ大なるものであらうと思ふのである。

第六章 現代女子に要求する事項

中庸を得るは難し

婦人と經濟との關係は前に述べた如くであるが、更に現代女子に望む所を概括すれば、大要左の如くであると思ふ、

一體、物の中庸を得るといふことは頗る難いことで、之を女子教育に觀てもさうである、即ち一方には女子の教育として、女子に直接關係ある技藝、家事經濟等を賤んで、無時に高尚なる學科のみを授け、女子の品性とか精神とかいふ方面にのみ注意する傾があれば、

他方に於ては、實科高等女學校などといふものも出來、女子に技藝、家事經濟の事を授ける組織の學校が非常に多く出來たのである。

思ふに女子としては、單に氣位の高いのみでも困る、女子は多く家庭の主婦となるものであれば、可成家庭に切實なる教育を施さねばならぬ、即ち技藝や家事經濟などは、一家を經營する上に多大の利益を興ふるものなれば、是非之を授けねばならぬ、けれども、それ等を本位として教ふる學校は、教師も生徒も、全く其の心組で、單にそれ等のみ力を注ぎ、何も彼もそれに傾いて仕舞ひ、兎角中庸を得ぬのである、此の如き教育は一家を經營する上に、經濟とか家

政とかいふやうなる種類の仕事には、巧者ならしめ得るが、どうも女子としての本分を、完全に盡すことが出来ぬやうである。

人の母たることを思へ

されば、女子は常に人の母となるものといふことを思はねばならぬ、人の母たる以上は、其の子女を教育して行かねばならぬ、單に技藝や家事經濟のことにのみを知つて、家の繰廻しが旨いばかりで、他に確乎たる高い精神がなかつたならば、到底完全に子女を教育することは出来ぬ、即ちそれでは子女に向つて、高尚なる品性を養ふことが出来ぬ。

忠愛の精神を養へ

蓋し子女に對して、國家の爲に貢献し、忠君愛國の精神を確かに把持せしむるといふことは、母たる者の勉むべき任務である、即ち女子は人の母として、親しく子女に接近し、寧ろ男子よりも直接に關係して居るので、其の子女の受くる感化影響は、父よりも一層多いのである、其の母たる女子が、單に一家の繰廻しがうまいばかりで、子女に感化を與ふる高尚なる力を有たなかつたならば、それでは主婦たる本分を完うすることは出来ぬ、思ふに世に一家の主婦として、良妻賢母たるの資格なく、唯だ毎日金銭上や生活上のことのみ屈

托し、肝腎の主婦たる任務を盡すことの出来ぬ者が多くありはせぬか、これでは全然高等下女と評されても仕方ないのであります。

武家の主婦と商家の主婦

そこで目今の女子教育上、最も適切に當嵌るは、昔の武家の主婦と、商家の主婦とを並せ學べばよからうと思ふ、即ち武家の主婦は、精神教育を重んじて子女を教育した、其の如く今日に於て高尚なる學科をも授け、精神教育を主としたならば、必ず氣位の高い、確乎たる精神を養へること、思ふ又昔の商家の主婦は、一家を經營するに重きを置きて、技藝や家事經濟の事を授けた、之も必要のこと

あるので、併せ做はしめば、日常に事缺くことはなからうと思ふ、所が之を併せ備へるといふことが中々むづかしいので、兎角一方に偏し易い、然しどちらに偏しても、完全なる女子といふことは出来ぬ。

品性と技術

要するに、今後の女子には、少くとも品性の修養と技術の養成とを兼習せしめて、其の目的を達するやうにしなければならぬ、蓋し女子は女子としての美しい點がなくてはならぬ、家事經濟をよく知つた上に、常識の修養、品性の涵養を勉め、同時に茶道や生花の如き

心を優美いゆうびにすることも必要ひつたうである、唯だ徒らいたづに家事經濟の事ことにのみ奔つて、無暗むやみに家計上の問題もんだいや、損益のことにのみ汲々きふくとしては、心が兎角賤こころしくなつて、女子ぢよしとしての美しい精神せいしんが缺けて、劣等れつとうなる品性ひんせいとなつて仕舞ふ虞おそれがある、又またさればといつて、無暗むやみに氣位きゐらみばかり高くなつて、虚榮きよえいの奴隸こまとなつても困る、畢竟は中庸ちゆうようを得るといふことにあると思ふ。

第七章 戊申詔書の御趣旨

前數章ぜんすうしやうに於て、現代國民の生活に就いて聊か論述ろんじゆつする所があつたが、翻つて思ふに國民の質素生活しつそせいくわつに就いては、畏かしこくも先帝陛下の御時に戊申詔書が垂示すゐじされてあつて、其の御趣旨に従へば毫も誤あまる所はないのである、そこで之これより同詔書を捧讀ほうどくした際の所感を繰返くりかへし、茲に我が國民の心得こころえとすべき要項を擧げて見たいと思ふ。

道徳と經濟との調和

さて戊申詔書ぼしんせうしょを拜讀して第一に起つた感想は、道徳と經濟との調てう

和の點である、即ち此の二者は、どこまでも互に助け合つて行かねばならぬものであるとの御趣意と拜察したことである、兎角何れの時代に於ても、此の二者を離さんとする傾を往々にして現はすので、一般の人心は勿論のこと、學者と稱へ社會を指導して行かうといふ考を有つて居るものにしても、此の二者を兼備するの必要を言はずして、何れかの一方に傾くのである。

先づ道德の方に就いて言へば、道德家といふものは、兎角人生の物質的方面を輕んずる傾を有つて居る、金錢其の他の俗事に就いて心を勞するのは、品性を害する事多しといふやうな考が、古來何れ

の國にもある、それが爲に道德に志す者は、多くは人生に於ける經濟的方面の必要を十分に認めなかつたのである、今日は其の考が漸次勢力を失うて來たのであるが、尙ほ高尚なる品性を養はんと希望するならば、此の俗世界の人々と交つて居ては、到底不可能である、此の世の中より離れて、世の中の事業を廢めなければ、實行が出来ぬといふやうなる考を有つ人がないでもない、即ち商賣は商賣で、事業は事業である、道德は是等とは全く別物である、かういふ考を有つて居る人がないでもない、乍併それは曩に陛下の下し賜はりたる詔書の御趣意ではないと考へる。

又經濟の方を重んずる人に就いて考へても、古來經濟を重んずる人は、兎角道德の方はそれほど大切と思はぬ、我々は實際の世の中に働いて、社會國家を利用して居るのである、一個人としての品行などは、別に顧みるに及ばぬ、我々は積極的に社會に、大なる貢獻をして居るのである、夫婦の關係や、一個人の品行などは別段それほど心配するに及ばぬ、かういふやうなる考が、昔もあつたが今日もまた無いとはいへぬ、乍併成申詔書を拜讀すれば、決してさうではない、我々日本臣民たる者は、此の兩者を、どこまでも兼ねて行かねばならぬ、經濟を重んずると同時に、道德を守らねばならぬ、道

徳によつて經濟を實行しなければならぬ、斯ういふ御趣意に拜讀して、感激に堪へぬ次第である。

世界的活動と日本の精神

第二に感じた所は、詔書の初めに仰せ出されてある通り、今日は日進月歩の世の中で、世界各國と交つて其の福利を共にする、世界的時代であります、今後我々日本人たる者は、此の御趣意に基づきどこまでも開國進取の氣象を以て、世界的に活動しなければならぬと考へます、それ故に日本古來の事にしても、此の方針に依て進んで行く上に、妨害となるものがあれば、一日も早く改めねばならぬ、

彼國の長所であつて我國の短所であるならば、之を採て世界的に活動し、益々日本國民たるの特色を發揮せねばなりません、乍併詔書の終りの部分に仰出されてある通り、我々は日本人である、どこまでも日本人としての特色を失つてはならぬ、日本には建國以來、日本の精神がある、此の日本人たる精神を一日も忘れてはなりません、皇祖皇宗の御遺訓は勿論の事、我等日本人たる者が、祖先の遺風として、堅く守らねばならぬものが澤山あります、西洋の文物を採り、西洋の文明を輸入すると共に、我々は日本人たる特色を失つてはならぬぞといふ御趣意を了解せねばなりません、此の二者に就いても、

動もすると、我々は一方に偏する傾を有つて居るのであります、即ち前者の精神に依つて活動する所の人は、後者の重要なことを忘れ、後者を重んずる人は、動もすると前者を退けるといふ傾を有つて居ります、之は詔書の聖旨ではないと考へます、我々は此の二者を、どこまでも兼ねて行かねばならぬ、かういふ御趣意に拜讀して、感激に堪へぬ次第である。

忠君愛國の精神と日常生活

詔書を拜讀して起つた第三の感想は、教育に關する勅語を拜讀致した時にも起つたのでありますが、更に詔書に依りて、一層明確に

感念を得まして、今後此の精神で進まねばならぬと感じたのであ
 ります、それは他でもない、兎角我々は忠君愛國といふことを狭く
 解釋する傾を有つて居ります、即ち國に大事變がある其時に、忠君愛
 國の精神といふものは現はれる所のもので、又一種特別なる事を國
 家に向て爲す、或は一種特別なる業務に従事する、かういふ事をな
 さねば、又かういふ時期にあらざれば、忠君愛國の精神を現はすこ
 とは出来ぬといふ風に、兎角忠君愛國といふ語を、狭く解釋するやう
 な傾を有つて居ります、所が詔書を拜讀して、勿論それ等も忠君愛
 國に相違ないが、それだけではない、忠君愛國といふ精神は、我々

が日常の生活、我々が日常の行ひ、極めて些々たる事に於ても、之
 を實行することが出来るのである、即ち書生は書生たる職分を忠實
 に盡せば、即ちそれが忠君愛國になるのである、商人は商業を着實
 に營んで、其の本分を全うすれば、それが一種の忠君愛國で、我々
 が平生實行すべき所のものである、女子に致しましては、一家を治
 めて、よく子女を教育し、將來日本に有益なる人物を造り出すとい
 ふことに於て、忠君愛國の精神を現はすことが出来、又之を實行す
 ることが出来る、別段演説をして諸所を廻るとか、或は著述をする
 とかいふやうな事をしなくとも、女子として日常の職分を全うする

ことを以て、陛下の御趣意に副ひ奉ることが出来るのであります、斯ういふ感念が私の心に起りました、即ち簡單にいへば、忠君愛國といふ事は、必ずしも特殊の業務、特別の職務、特別の時期を待つて實行すべきものではない、日常之を實行せねばならぬものである、かういふ事を感じたのであります。

外人の見たる日本人の缺點

次に聖旨を奉體して、將來日本臣民として、其の本分を完うする上に、如何なる事をなさねばならぬ乎と言ふ問題に就き、先日我が政府に備はれて居る或外國人に就いて、其の意見を聽いて見ました、

即ち今後の日本人は、如何なる點に注意しなければならぬと貴下は思はる乎、如何なる點が我々今日の日本人の缺點と見られるか、又我々日本人が今後世界的に活動して行く上に、如何なる點が妨げとなると、君は思はれるかと聽いて見ました、此の外國人は我が政府に二十年近くも備はれて、専門の學問を青年に教授して居る所の人で、而も日本を熱心に愛する所の人である、然るに其の外國人は、一週間の猶豫を與へて呉れよというて、十分に考へた上で、三の答を持てました、先づ此の三點に就いて述べ、次に又一二自分の考ふる所を加へて述ぶる積りであります、勿論外國人より聽いた三點も

決して悉く新しいことではない、我々青年の教育に當つて居る者は、豫て氣付いて居る所であつて、演説にても、又著書雑誌等にも述べたことでもあります、然し外國人も、矢張我々の見るが如く、是等を日本人の缺點であると考へて居るので、此の事を第一に述ぶるのがあります。

時間の經濟を知らぬ國民

今日の日本人の缺點は、兎角時間の經濟といふことを知らぬ、時間を大切にすることを知らぬ、時といふ考が頭にないやうである、是は老人ばかりではない、今日高等の教育を受けつゝある所の青年

に於ても同様である、此の如く時間を無益に費す所の國民は、歐米にはない、斯ういふ事を此外國人はいつた、此事に就いて自分も、篤と考へて見たが、如何にも此の缺點に就いては、我々今日の者は辯解の仕方がない、勿論人間には、相當の休息といふことも必要であります、相當の保養といふことも必要で、三百六十五日働き詰に働けるものではありません、健康上より考へても、亦精神發達の上より考へても、休息は必要であります、又時に保養も必要である、乍併今日我々が時間を無益に費す習慣は、多くの點で現はれて居るのであります。

即ち講演の開會に於ても、午後正一時が二時となり三時にもなる、主催者の悪いのみではない、實は聴衆が集まらぬためである、又通常の會食などにしても、どうしても一時間か一時間半、甚だしきに至ては、二時間位其通知に懸直があるやうに思ふことがあります、我々如き貧乏暇なして、毎日忙しく暮して居る者は、二時間も無益に費すといふことは、實に苦しいのであります、乍併他の人が來ぬので致方がない、自分だけ食つて歸る譯にも行かず、皆の揃ふまで待たねばならぬことが往々あります、西洋では、鐵道が開けると、時間が正確になるといふことを言うて居ります、成程片田舎の人は

時間を大切にせぬ、然るに鐵道が開けると、何時でも其處の人々も時間を正確に守るやうになる、日本でも此の傾向があるであらうと思ひます、然るに甚だしきは日本政府の鐵道でも随分時間の違ふことがあります、殊に一の停車場で乗て他の停車場で乗換へねばならぬといふ場合に、時間表に依て連絡が付くといふ考で行くと、大抵外れる、後れる、そこで次の汽車を待たねばならぬことが出來て、僅か二三時間の旅行をするのに、一時間も待たなければならぬことが随分あります、政府の仕事でも此の通りであるので、況して民間の人々が營んで居る事業などに於てをやた、随分時間を無益に費

して居ります、近い例を言へば、自分は目下東京の郊外に住んで居つて、毎日電車に乗て勤めの場所に出る、其の時間は電車或は汽車を利用して四十分あれば達することが出来る譯であります、ところが其の考で行つたならば、何時でも正しく行けぬ、それ故に安全に自分の職務の時間に、其處へ達する爲には、少くとも三十分の餘裕を見て置かなければならぬ、而もそれが毎朝脳髓の最もよく働く大切な時間である、夜は殆ど疲れて仕舞つて何事も出来ぬが、朝は學者に取て最も貴重の時間である、其の貴重の時間を、毎日三十分宛失ふのである、誰が之を失はせるかといふに、汽車電車の時間が正

確でない爲であります、それも營利的にやつて居る人の仕事ならば仕方がないとしても、政府で監督して居る仕事であるといふ所より考へると、随分他に時間を無益に費して居ることが、日本には澤山あると思ひます。

それで前言つた通り、聖旨のある所に基き、日本人が、世界的に活動して行くには、今少し此の點に、今後人民全體が注意する必要がある、勿論時間を儉約する必要のない人もあらうが、今日の社會では、人々何れも仕事が多くて閑人は餘りないのである、是等の點に注意して、各々其の職に對して忠實に力を盡すといふことになれば、

國家を利すること、鮮少ならずと考へるのであります。

廢物利用と日本人

第二、次に日本人今日の、短所は廢物利用の途を知らぬ事である、日本在來の物に就ては、中々能く廢物利用が實行されて居るが、近頃西洋より這入つた所の品物に就て考へて見ると、餘程此點が缺けて居りはせぬかと思はれます、是に或點までは致方がない、何故かといふと、日本で其物を使ふことを知らぬ、其物を取扱ふ良法を知らぬ、それ故に其物が損ずれば、之を何に使うてよいか分らぬ、どうして之を修繕してよいか分らぬ、かういふ類の品物が澤山あります、

かういふ物は、何かに使へさうなものといふことを知て居るが、其使ひ方を知らぬ爲に、廢物利用の法が行はれて居らぬのであらうと考へます、一例を言へば、護謨靴の如き、護謨はまだ日本ではよく使ふことを知らぬ、護謨靴は何處か少し破れると捨て、仕舞ふ、西洋では直す所があつて、穴があれば、それを膳うて、尙數ヶ月間使ふのである、我國では今日はどうか知らぬか、二三年前までは少しでも破れたならば、之を捨てる、其廢物利用の方法を知らぬため、餘儀ないのであります。

それも單に一個人として、さういふ風になつて居るのみでない、

大なる會社又政府の事業に就て考へて見ても、矢張同じ事で、兎角十分に廢物利用の方法が行はれて居らぬやうであります、前の西洋人の談に、日本でも俸給取の生活は益々困難になつて來るやうである、それには自分も同情を寄せる、乍併今少し日本人に廢物利用の精神が實行されたならば、此困難を幾分軽くすることが出来るであらうと、かういふ話でありました。

女子教育と廢物利用

之に就ても、如何にもさうであると其言に感じた、然らば、どうすればよいか、勿論男子も此事に注意せねばならぬが、殊に此事に

力あるのは女子である、一家を整理する所の女子である、今日の女子教育は、勿論昔のやうに、唯だ女大學一冊では十分でない、種々の事を教ふる必要があります、殊に母として子女を育てる上には、様々の事を知つて居なければなりません、それ等の事は何も知らぬ女子では、日本將來の國民となる兒童をば、完全に養育することは甚だ困難であらうと思ひます、乍併餘り様々の事を教ふる爲に、女子に必要な廢物利用の教育などには、一向手が屈いて居らぬやうに考へられる、今後の女子教育上には、色々注文を要することもありますが、此點に特に注意して教育しなければならぬと考へます、世帯

持が下手であるといふのは、即ち此所より來るのでなからうかと今日考へられます。

男女濫費の慣習

男子も亦随分廢物利用を實行せぬのみならず、外國品を濫費する傾があります、是等は男子も亦注意して行かねばならぬ點といひます、例へば煙草を用うる人に就て見るに其の濫費が甚しい、即ち西洋人にも随分煙草如きの人はあるか、然し濫りに之を用ひぬ、時間を極めて、煙草を用うるのが通例である、どこでも構はず無遠慮には用ゐぬ、是が一の禮義であります、所が日本人は、仕事をしな

がら燻べて居る、甚だしきに至ては、非常に強い煙草を用ゐて、煙草嫌ひの者は到底其附近に居られぬやうな困難に陥ることがあります、煙草を用ゐる人を功撃するのではないが、モオ少し時間を限つて朝より晩まで、巻煙草なり、シガレットなどを用ゐ通しにせぬやうにしたら、どうかと思ひます、此等は其人に快樂を與ふるもので必ずしもそれを止めようとは申ませぬが、モオ少し制限した方が衛生上にも利益となり、且又儉約の一つにもなりはせぬかと考へられます。

最も改善の急務たる我が實業道徳

前記の西洋人より聴いた第三の點は、今日以後日本人が、世界的に活動して、世界諸國の人と競走して行く上に、一日も早く、是非とも改料せねばならぬことは、日本の實業道德である、今日の如き商業の仕方、今日の如き製造の仕方が、日本に行はれて居つては、到底世界各國人と、商工業の上に競争して行くことは出来ぬと、此點に就ては、餘程烈しく意見を述べました、其例として、日本には殆ど商業道德の標準がないやうになつて居る、二つの道德が日本に行はれて居りはせぬかといふことまで、述べました、即ち紳士として交際する上の道德と、商業工業上の道德とは、丸で違つて居る、

商業に従事して居る人に、紳士として交際する時には、如何にも感服すべき點が澤山あつて、西洋人の及ばぬこともないではない、乍併商業といふことになる、徳義といふものは、何處にあるかと思ふばかりである、日本は確かに道德が二様になつて居ると述べました、是等は、日本人が將來世界的に活動して行く上に、是非とも改良せねばならぬ點と考へます、勿論歐米人の方にも、毎々日本の事に就いては誤解があつて、何時も日本人が悪いのではない、我と彼と風俗習慣が違ふ爲に、日本人を悪いやうに考へて居ることもあります、是等に就て随分氣付いて居る事もあります、が今は省略致します、

て置きます。

勤勞を厭ふ風潮

以上の外に私の考へた事は、今日の人々殊に青年の中に勤勞を厭ふ精神が段々増長して來るやうに感ずるのであります、働くことを好まぬ、自分で働いて自分でやつて行くといふ精神が弱くなるやうに考へられます、人は勿論動物でありまして、誰も皆自分で働いて、自分で食ふのが當り前でありまして、他の動物には遺産はない、皆自分で働いて生活して居るのであります、單り人間に限つて自分が働がすとも、他より譲り受けたるもので、生活して行くことが出来る

のである、そこで其れが段々と習慣となつて、働かぬのが人間の名譽で、働くのは、貧乏人、卑しき者のする事である、かういふ風潮が益々廣まつて居るやうに考へられます、高等小學又は中學程度の生徒が何をいふて居るかと注意して見ると、あの先生は樂である、あの先生は窘めるなどいふて居ります、樂といふのは働かずともよいといふことであります、さういふ風に、樂な先生はいつでも受けがよい、其樂といふことを分析して見ると、詰る所、勤勞を卑み、勤勞を嫌ふことに外ならぬのであります、今後我々が世界的に活動して行くには、もう少し骨の折れることを厭はぬやうにならなければ

ばならぬ、此の勤勞を嫌ふ傾が何より生ずるかと考へて見ると、社會全體に僥倖心といふものが益々盛んになり、骨を折らずに、一攫千金、旨い事をして大儲けをしようといふ精神が、一般に廣まり、所謂勤勉忠實の精神が、社會全體は缺けて行く所にあるのであります、これは正に詔書の御趣意と正反對の傾向であると考へます。

人格を尊重せよ

次に私の言はんと欲する點は、今日の法律上に於ては、人は誰も人格が認められて、各々相當の資格を有つて居るのであります。が、まだ一般道徳上に於ては人格を尊重する習慣が完全に發達して

來ぬやうに考へられるのであります、又人格といふ言葉の意味も十分分らぬ人があるかも知れぬ、乍併人の人たる所、即ち禽獸と異なつて居る所は、人格にあるのであります、人格といふものは、如何なるものが、人格は各々目的を有して、社會に存在して居るものであります、それ故に人は皆互に其目的を達し得るやうに協力しなければならぬ、他人の妨げになつてはならぬ、人には各々權利義務といふものが道徳上にもある、此權利義務を互に害ふ如きことがあつてはならぬ、かういふのが、即ち人格を尊重するといふことであります、是等の感念がどうも、まだ十分に普及せぬ爲であらうか、色

色の方面に於て弊風が現はれて居ります、此人格の尊重といふことが、社會全體に實行されまするならば、言はずして社會に信用といふものが増すのである、今日は何をしても信用といふ事が大切である、其の信用が日本今日の社會に不十分であるのは、互に人格を尊重する念慮が足りない所より來るのでないかと考へられます、又日本人には公德が足らぬといふ事もよく聞き、或はさうかも知れぬ、此の公德なるものも唯だ公德々々といふた所が出て來るものでない各々の人が他の人に對する人格の觀念が、明かになつて、他の人格と尊重する精神が實行されたならば、自然に公德は現はれて來るで

あらうと思ひます、此點は或はまだ、學校の教育が足らぬためかも知れませんが、故に今日學校に於て既に此語を聞き、明確なる觀念を有て居る人は、唯だ其觀念を有て居るといふに止まらず、之を實際の上に応用されんことを希望して止まぬのであります、啻に大事件に於て之を實行するばかりでなく、電車に乗るにしても、又會場などより退出する時にしても、各々の人が互に人格を重んじて行つたならば、亂雜なる行爲は、大に社會より取除かれるであらうと考へます。

拜金宗を排せよ

次に今一ヶ條注文致して置きたいことがあります、それは何かといふと、今日段々社會に普及して、世間の流行となるやうに考へらるゝ拜金宗の傾であります、前にも段々と述べたる通り、日本の富を増すといふことは、之は言ふまでもなく、目下焦眉の意である、乍併何もかも、人の持つて居る金銀の多少によつて決めるといふことは、甚だ宜しくない傾向であります、即ち人の持つて居る金高を總ての標準にして、其人の貴賤を決める傾向がそれである、若しさういふ風に財産の多少といふことで、如何なることでも決めて行くといふことになつて、如何に高尚なる品性を有つて居る者でも、貧乏で

あるので卑しめる、如何なる卑劣手段で財産を作つた者でも、上席を占めるといふ風が、日本一般の風俗となつたならば、實に憂ふべき事であると考へます、此金錢標準といふものと、一方に於て我々が國の富を増すことが必要であるといふことと、が、動もすると混合されるのであります、富が國家に重要である、國家の富を増すことが必要であるといふことを主張すると、直ちに拜金宗を主張するやうに思はれる、又拜金宗を攻撃すると、國家の富を増進することに反對するやうに取られるのであります、此點に誤解のないやうにしたものである、兎に角今日は一般にさういふ傾があります、人物を

評するに當りても、第一に彼は月給を何圓取つて居る、何百圓何千圓かと聞く、其人の身分、其人の社會に於ける地位がそれで定まる、自動車に乗れぬ人の中にも、我々が頭を下げなければならぬ貴き人が澤山ある、唯だ立派なる衣服を着て、立派なる自動車に乗つて居る人のみが、社會に於て尊敬すべき人ではありませぬ。

又今日の青年が志を立て、自分の將來の方針を定むる標準、即ち將來自分が修むる學問の定め方や、又將來自分の職業の撰み方が、金錢標準に傾いて居ります、何の學問を修めやうか、アノ學問は貧乏學問である、金にならぬ、此學問は儲かる、自分は此方に行かう、

斯ういふ風である、是は拜金宗流行の影響であります、此の如く大學や高等學校などに居る者までが、金錢を標準にして將來の目的を立てるといふ傾は、實に國家の爲に憂ふべき事と考へます、希くは紳士を以て社會に立つて行く考の者は、十分に注意して、國の富を増すことに盡力する事は勿論であるが、此拜金の傾向は、成るべく早く退治するやうに盡力せねばならぬと思ひます。

昔の人が志を立て、學問をした時には、儲かる儲からぬなどいふことは、眼中に置かなかつた、國家の爲になるか、ならないかといふことが、主要點であつたと思ひます、三十年前我々の志を立てた

時に、儲かる儲からぬを標準にして志を立てたならば、恐らく今日の日本は出来て居ないと思ひます、國家の進歩發達の爲に盡さうといふ一念で、各々其志を立てたので、茲まで進んで来たのであらうと考へます、今日のやうに多くの青年が、金銭づくで志を立てたならば、實に三十年後は、憂ふべき世の中になるであらうと、私に憂慮に堪へぬのであります。

意志教育の必要

最後に今一つ希望する所を述べて結論と致します、今日の教育は、知識に偏して居る、國民全體の教育が、知識の方に偏して意志の教

育が缺乏して居る、固より知識は必要である、今日は三十年前の知識では行きませぬ、今日は今日の知識によつて、世の中に處して行かねばならぬ、乍併知識のみに傾いて、今日の如く、一般臣民の意志教育或は精神教育が、勢力を失うて、薄志弱行の人が社會に増加したならば、實に國家の將來は、憂ふべきでないかと考へるのであります、今日の人が志を立てるのを見るに、少しむづかしいと速かに他に轉ずる、他の事を試みて見て困難になると、又變へるといふ風で、自分の立てた志を死しても貫くといふ意志の元氣がない、それで教育に従事して居る者は勿論、他に種々盡すべき點もありません

が、今少し意志教育の方面に力を盡したい、最も此意志教育といふことは、獨り教師がやらうといふた所で、其教育を受ける人が、自分で意志修養を努むる意にならねば、他より注入しては出来ぬ、それ故に今後の青年は、どこまでも學校に於て教へられる所の、課業を忠實に修むると同時に、個人的に意志の修養に注意すべきであります、何事に限らず、自分が意を決したことは、之を貫徹せずんば止まぬ、即ち古人のいふた精神一到何事不成といふ元氣を振ひ起して、世界の知識を集めると同時に、健全なる品性を修養せんことを希望して止まぬのであります、此等の點に努めたならば、自然成

申詔書の聖旨に幾分副ひ奉ることが出来るであらうと考へます。

第八章 労働の倫理

我が國富の程度

古來東洋に富國強兵なる語があつて、國家を隆盛ならしむる要件としてある、成程それに相違ないのであつて、我國は二十七八年役の日清戦争に大勝利を得、更に十年後の三十七八年役に露國と戦つて之に勝つた、それより日本兵は歐洲諸國の兵と比較して、毫も劣らぬといふことが世界に明かになり、今や殆ど疑ふ者なきに至つたのである、所が此の強兵と並へ稱せらるゝ富國の點は如何であるか

といふに、これはどうも列國と比して餘程劣つて居るやうに思ふ、一度外國に行つた者は、誰でも直ちにさういふ感想を起すのである、然し今後我國が他國と競争して、總ての事に於て彼等の後ろに立たず、寧ろ彼等よりも一層進んで行かうといふには、どうして、雷に兵の強いのみでなく、國を富まさなければならぬと考へる、それには第一労働といふことを奨励しなければならぬ。

労働の必要并に發達

労働といふことは、經濟學を少しく研究した者は、誰も知つて居る如く、古代には社會の最下級者が多く従事したのである、従て今日

にても労働其物を賤しきものゝやうに思つて居る人がある、乍併社
 會が日一日と進み、方今の如く階級制度が倒れて、四民平等となり、
 人民は皆同じ人で、同等の權利を有する者であるといふやうに變遷
 しては、労働に關する思想も自然變つて來るのである、即ち奴隸と
 か奴婢とかいふものは、社會の劣等者で、彼等の爲す事は賤しき事
 のやうに考へて居つたが、社會の進歩するに連れ、労働といふこと
 も、亦大に進み、昔の束縛の労働なるものが漸次に減じて、自由の
 労働、契約の労働といふ風になつたのである、そこで何程の賃銀を
 貰つて何程の仕事をするといふことに變つて來て、誰も労働するこ

とを賤いとは思はぬ、ツマリ賃銀が欲しいので、人々勝手に働くの
 である、かういふ風に考へが進んで、労働を賤むことが減じたので
 ある、されば歐米諸國などでは、常に労働を賤しめざるのみならず、
 學者の中には「労働は神聖なり」と説く人をさへ生じ、今日にては、
 労働者である爲に、人が卑劣であるとか、品性が劣等であるとは考
 ぬ、今も尙労働に對する思想は進歩しつゝあるのである。

我が邦人の労働に對する誤解

世界の狀態が此の如くであるのに、我が邦人の労働に對する考へ
 を見ると、中々そこまで進んで居ない、それが爲に働くといふこと

を誰も彼も嫌ふ傾がある、従つて國富を生ずる力が、歐米諸國の如く強くないのである、されば今後は成るべく壯年者は、労働に對して正當の考へを有し、之を實行して歐米人が労働に對して有つて居る如き考へを我國に普及し、其の結果管に兵の強いはかりでなく、國が富んで居るやうにせねばならぬと考へるのである。

乍併今日未だに労働を賤む風があるのは、無理ならぬことである、それは我國では封建制度が倒れてより長い年月を経て居らぬ、其の當時は嚴重に階級制度が行はれて居つて、労働は立派なる人のすることではなかつた、其の考へが今まで残つて居るのは、決して怪む

に足らぬ、然し憂ふるのは、三十年前よりも、今日は却て労働を賤む風が盛となつて居りはしないかと思ふ點である、三四十年前には、一般に百姓や町人は、働かねばならぬ者であるといふ考へであつた、働くが本當で、働かねば、人より賤められるといふ風であつたと、確かに記憶して居る、所が今日は誰も彼も、皆昔の中流以上の人々の如き考になつて、農工商の實業に従事する者でも、矢張手を懐に入れて、柔かなる手をして居る程立派であつて、働くのは劣等者のすることであるといふ風に、多數人が考へて居る傾がある、三十年前には、日本の一部の人の考へであつたことが、今日は全體の考

へになつて居るので、却て労働を賤めることは、昔日よりも甚だしくなつて居ると思ふ、故に吾々は、此の點に就いては、世界の大勢に反對したる傾向を、取つて來て居るといはなければならぬ。

我邦人の労働を賤む實例

今其の一例を述べれば、歐米を漫遊した人は、誰でも會社は勿論の事、役所其の他何處に行つても、日本程多くの人を使つて居る國はないことを感ずる、先づ日本には給仕が置いてある、給仕も一人ならず、二人も三人も置いてある、自分で辨じ得ることでも、小使を使ふ、少しでも身體を動かさぬ方が、高尚であるといふ考へで、

働くことを何處までも好まぬ、又日本風の家屋には下足番といふ者が居る、自分で自分の下駄を直して降りて行くのは、賤しいこととして、必ず下足番に直させて降りる、それが通常紳士のすることであるといふ風になつて居る、それから、昔は大抵の家は、左程多く下女下男を使はなかつたが、今日は、社會に於て、特別貴き人でもなくとも、澤山下女下男を使つて、成るべく、自分は働かぬやうに、自分の體を動かさぬ方針を取つて、それが自分の威嚴を保つに必要である、即ち上品であるといふやうに考へて居ると思ふ、さういふ風の人に澤山使ふので、勿論使はれる者は薄給である、それで本氣